

本多狷下の三大名著

法華經要義

四六判 六百數十頁
總振假名付
定價 金 參 圓

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に賜天覽、供臺覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判 三百五十餘頁
總振假名付
定價 金 壹 圓 八 十 錢

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須欲くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判 七百餘頁
總振假名付
定價 金 參 圓 五 十 錢

十二篇に分類し教義信條の整束歸結を懇説せるもの、誰人にも易々として理解の金鍵を與へらる。

東京府荏原郡品川町妙國寺内

「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

| 價定一統 | |
|------|-------------|
| 一ヶ年 | 金 貳 拾 錢 |
| 半ヶ年 | 金 壹 圓 貳 拾 錢 |
| 一ヶ月 | 金 貳 圓 貳 拾 錢 |
| 送料共 | 送料共 |
| 事之金前 | 事之金前 |

| 料告廣一統 | |
|-------|---------|
| 四分一頁 | 金 五 圓 |
| 半頁 | 金 九 圓 |
| 一頁 | 金 拾 五 圓 |
| 表紙一頁 | 金 貳 拾 圓 |
| 事之金前 | 事之金前 |

昭和五年三月廿四日印刷納本
昭和五年五月一日發行 (第四百二十二號)

製復許不

編輯人 磯部滿雄
發行人 鈴木日雄
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

振替東京五一〇七一番

目次

| | |
|-------------------|------|
| 遍滿、含蓄、中心…………… | 本多日生 |
| 天風三萬里紀行(其十一)…………… | 小林日種 |
| 禁酒運動と信仰…………… | ……… |
| 記事…………… | ……… |
| ○JOAKだより | ……… |
| ○知法思國會街頭布教誌(其一) | ……… |
| ○各地教報 | ……… |
| ○誌料領收 | ……… |

第三十五年六月號

統

一

遍滿、含蓄、中心

大僧正 本 多 日 生

「遍滿、含蓄、中心」と題して、佛教の卓越せる所以と並に佛教の歸結に關して大要を述べようと思ふ。

一、理教の關係

先づ最初に「理教の關係」といふことであるが、これは真理と教義の關係である。宗教が教を立てるに就ては真理に基づくべきものである。西洋思想では真理と宗教といふものが二分されて居るのであるが、それは全然誤つたる見解である。西洋では學界に於ても教界に於てもすべてさういふ見解を是認して居るけれども、それは幾ら多數の者が認めても誤つたる見解である。宗教が真理に基かないで、たゞ

感情的に人の氣分を慰めたら宜い、真理の方ではさうぢやないのだけれども、まあさう言つて置いた方が宜からう……といふやうな薄弱なる根據に於て宗教を立てるといふことは、どれ程多數者が認めたにしても許さるべき事ではないのである。

佛教の方に於ては理教の關係は離るべからざるものだと申すのであつて、釋迦如來が教を説かれるのは、その根柢に於て大なる真理を覺つて、それを軟かな語に直して吾々を導き給ふので、即ち法華經の藥草喻品にあるが如くに、

「我は是れ如來なり」

と宣言せられるのである。如來といふことは「如」は真理であり、「來」はその真理その儘が人格を有つて

人々を教はんが爲に人生に來れりといふことであつて「如來」そのものが眞理と救済とを結合して居る名稱である。西洋のやうに眞理は哲學者が受持ち、宗教は感情的に慰めて行くのだといふやうな、幼稚な間に合せな事柄を以て數千年間押切つて來たといふことは、非常な人類の不幸であつたのである。今猶ほ覺めずして、さういふ事の爲に宗教は不合理な事を言つて、今日科學の反對を受けて、そこに缺點ある爲に唯物思想などが跋扈し、その結果は共產主義などを持來すやうな餘地を與へたといふに就ては、これは學界教界共に責を負ふべき大なる失態であると思ふのである。宗教がモット／＼堅實なるものであつたならば、今頃になつて人生に唯物主義などが跋扈し、その結果兇暴なる思想を是認し、多數者がそれに共鳴するなごといふやうな、斯様な誤つたる大失態を、人類の中に、所謂彼等が誇りとして居る二十世紀の文明の中に實現する事のあり得べき

ものではないと思ふのである。釋迦如來は「如來」の一語にすらさういふ深遠なる意味をお示しになつて居るが、續いて「我は是れ一切知者なり、一切見者なり」と仰せられて、すべての事柄を見透すものである。上には宇宙の眞理を見透し、下には人々の心を見透し、又世の有様、社會の構成、國家の建設、人類文明の如何にあるべきかといふ事の總てを知り、すべてを見透して教を立つるものである。たゞ間に合せに感情的に教を立つるといふやうな事は申さないものである。隨つて「知識者なり、開道者なり、説道者なり」と仰せられて、心には道を覺り、身にはこれを行つて導きを與へ、口にはこれを説いて教を立てたるものである。故にその教は眞理から離れたナンといふやうなことはどうしてもあり得べきことではない。理教は全く相離るべからざる關係である。それ故に「教」といふ一字を詳しく言ふ時分には「示教利喜」と經文には説か

れて居るのである。その示すといふ所にその事柄即ち眞理を示し、その示す語に教といふものが出來、教がある限りはそれを聽きし者は利益を得て歡喜するといふ、その眞理から歡喜までを禁いで居る所に「教」といふ言葉があるのである。實にさういふ事の原則に於て既に佛教は偉大なる價值を有つ、所謂卓越せるものである。

陷ることを意味するものである。常見とは今日の即ち放縱生活、姪靡墮落のこの現代を襲うて居る觀念が即ち常見外道と稱せられるものである。唯物史觀などと唱へて、唯パンの問題のみに熱中して高遠なる宗教を罵るものが斷見外道である。故に共產主義などは先づ當面の敵が宗教である。國家の主權を呪ひ、或は富豪を呪ふが、それよりもモット強く宗教を呪ふものである。故に先づ一番に坊主の頭を撲り、續いて主權者を虐殺し、富豪のどてつ腹を蹴上げる、斯ういふ順序に行くのであるが、さういふ考は即ちこの斷見外道の思想から流れて居るものである。

大體に於て釋迦牟尼が攻撃目標としたるものは當時の思想の斷見、常見、空見といふやうな見解に對して、これを痛撃粉碎した譯である。斷見といふのは所謂唯物主義で、人間の靈魂の存在を認めないものである。常見は無道德の思想で、何をやつても自分の良い者は又同じ身分に生れて來る、婆羅門種は幾ら悪い事をして又婆羅門に生れて來る、國王の息子はどんな罪惡を犯しても又國王に生れて來る、長者の息子は又長者に生れて來るといふやうな考を有つて居る結果は、即ち享樂の生活、墮落の生活に

空見といふのは同じやうでもあるけれども、少し違ふのは、一切の事柄を虚無に歸してしまふものであつて、今日の共產主義或は無政府主義などをモウ一つ徹底すると虚無主義と申して居るが、あゝいふ傾向を執れば自然そこに行くのである。何もかも在

るものではない、人間が死んで消えるは無論であるけれども、生きて居る間とても碌なものではない。その存在の意義といふものはくだらないものである、どうでも宜いものである、随つて他のものは無論無價値なものだ、撲り倒さうが、ぶち壊さうが、首を吊らうが五分々々だといふやうな思想になつて行くのである。彼等の仲間の隨ち行く所はその通りである、林烈などの思想の経過を法廷で述べて居るのを聞けば、彼等は最初朝鮮の獨立運動から我が皇室を恨んだ、續いて共産主義に入り、續いて無政府主義になり、遂に虚無主義になつて、到頭終ひには一切の存在を否定して縦横無盡にぶち壊すことが絶対の真理の如くに彼は考へて居るのである。その通りの事を長たらく文章に書いて來て彼は公判廷で讀上げて居つたが、さういふのが空見の思想である。ちようど大乘佛敎家が誤解して小乘の思想を攻撃して居る言ひ分も、小乘それ自身はさういふ考ではな

いけれども、大乘家の方から誣罔して、小乘はこんな考だからいけないと言つて攻撃して居ることに、即ち空見といふものがある。それは人間は身があるから苦勞をするのである、心があるから煩惱を起すのである。故に身を灰にしてしまひ、心を無くしてしまふ、「灰身滅智」と言つて、身を灰にし人間の智慧を滅してしまふ、さうすると何も無くなる。それを無餘涅槃と言つて空々寂々何も無い、そこまで行けばそれが究極の目的なり、斯ういふのが小乘の思想である、そんな事はつまらぬと大乘家が言つて居つたのであるが、それは小乘に對する無論誤解であり誣罔であるけれども、さういふ思想は大乘家が殆ど協同一致してそんな事を永い間攻撃して居つた。それは左様に攻撃される相手が果してさうであつたとするならば、確に理由のある事である。それは釋迦如來が到る處にさういふ虚無の思想を攻撃せられて居るからである。

今申す斷見、常見、空見といふやうな思想を否定したるものが佛敎である。それを否定するごういふものが現れて來るかと言へば、斷見の裏は、人間の魂といふものは死んでも滅るものではない、随つて過去にも存在したるものが續いて來たのであるといふ、この生命の永存といふことを確實に認める思想が正しいのである、それを認めざるものは邪見であるといふことで釋尊は奮闘をせられたのである。それから常見の裏は、どんな事をしても長者は長者に生れて來るといふやうなことは因果撥無と言つて、業の力を認めないものである、善業惡業の關係を無視して、惡を爲しても同じ身分に出て來るといふやうなことは、因果應報の理を否するごころの邪見である、であるから常見の裏は因果應報の理、これが即ち釋尊の力説する所であつた。空見の裏は何であるかと言へば、即ち一切の事は無ではなくして眞の存在を意味して居るものである。何もかも實

在性を帯びて居る、佛様に就ては無論であるが、人間に就てもその他の一切の諸法悉く不生不滅であつて、一物と雖も滅する物なく空に歸する物は無い、燦爛としてこの大宇宙は存在して居るものである。所謂花咲き鳥鳴るといふやうに、何もかも所謂「妙色湛然として存す」で、何とも言へない實在性なる麗かなものである。そこに即ち世界で言へば淨土といふものがあり、佛で言へば本佛があり、衆生で言へば即ち當體蓮華の妙を有つて居るものであるといふ風に、一切のものを實在性に説明して行くのが空見の裏になるのである。であるからこの魂の存在及び因果の理を認め、一切のもの、建設的存在を認めて、麗かなる天地といふものに進んで行くのが佛敎徒であるといふことになる。

さういふ大きな觀念は、千年や二千年経つても少しもその必要が變化するものでない。それを今日ちようど釋尊が攻撃せられたと同じやうな考を以て、

今頃唯物思想を鼓吹したり、享樂主義を鼓吹したり、或は自暴自棄的に一切をぶち壊すやうな大破壊思想を持來るといふやうなことは、實に釋尊が當年痛撃をせられた目標と寸分違はない、全然同一なる人生に於ける邪念邪思想といふものである。左様な明瞭な誤謬は佛に依つて矯正せられて、爾來三千年に垂んとして居るところのこの人類の文化を逆轉せしめて、今頃そんな思想の爲に迷ふ、殊に若い學生が迷ふナンといふのは、如何に若いにしても、學生にしても、餘りにそれは不用意千萬な事で、笑ふに堪へたることである、少しは人類の文化を研究しなければならぬ。社會科學ナンと言つて居るが、社會といふものはそんな食ふ事だけで出來て居るものではない。人類の文化といふものは彼等の考へとは全然反對である。少しでも傾があつたならば人間は道德を行はう、氣品の高き文明を造らうとするのである。必ずや人間といふものは成功して行つたならばどうい

かに今日生活が困難になつたからと言つて、この困難といふことは必しもさういふ方法に依らなくとも救ふべき途はある。モット／＼人間がさういふ横着な料簡を有たないで、所謂勤勞の生活に移りさへしたならば生活は安定するものである。何も難しい事はない、經濟學者はさう考へて居るか知らぬけれども、露西亞なら露西亞の人間を幸福ならしめるものは共產主義ではない、露西亞人のあの懶惰なる生活を矯めて勤勞の生活に移せば、露西亞人の幸福は來るものである。吾々日本人の幸福も亦さうである、いろ／＼政府の政策がさうであるとか、金解禁がさうであると言ふ、それは幾らか影響はあるかも知れぬが、結局日本人がモット／＼勤勞の精神になつて、能く働いて無駄の無いやうにして充實したる氣分になつて、親父から息子、下女、下男の末に至るまで緊張味を帯びた時、必ず日本人の生活の安定は來るのである、餘は區々たる議論である。

ふ考を有つかといふと、俺も昔とは違ふから、さう胡坐ばかりかいては居れない、たゞ酒を喰つて文句ばかり言うて居つてもいかなないから、まア顔を洗つて傘でも一つ合せて見なければならぬといふことになつて、道德的に宗教的になつて來る。家庭に於ても今までは床の間にも襦袢を抛り出して居つたのを、埃を拭いて、さうして夜店で買つて來た五十錢の軸でも懸けようかなといふことになつて、人類といふものは文藝に於ても、道德に於ても、宗教に於ても高等なる生活に移らんとすることが、個人に取つても、社會に取つても人類の努力して行く所である。

さういふものを一切不要なものである、不生産的のものである、皆焼いてしまへと言つて、さうして印半纏を着て藁の上に胡坐をかい馬鈴薯に鹽を附けて食つて、これで腹が大きくなつたと言つて居るのは、それは豚の眞似をするやうなものである。如

それは何故かといふと眞理の示す所、經濟問題にしても、分配の問題や組織の問題ではなくして、生産そのものを發展せしめることが根本問題ナンである。社會といふと廣いからわからぬけれども、一軒の家で考へて見たらわかる、親父の取分がどうちや、息子の小遣ひがどうちや……そんな問題ではなくして、皆が能く働いて儉約をするといふ根本の觀念が成立てばその家は幸福に行くのであつて、その勤勞の精神を取つて親父がどうちや、息子がどうちや……そんな事を幾ら議論して見たところで、議論倒れで遂に夜逃げをするより外ないものである。

であるから斯様な事の爲に多くの時間を費してやかましく議論を繰返すよりも、モット高い文明の建設に努力すべく國民が緊張しなければならぬ。それは即ち釋迦如來が努力せられたところの、人間の心を宗教的に導いて、さうして平和なる精神に活き、勤勞の精神に進み、菩薩行に就て行くといふやうな

温かな人生を造ることをお示しになつた、この真理はどうしても最後の勝利を占むべきものである。今の文明は變態であつて、これは人類の爲に禍ひを持來す文明である、即ち不平と争闘と破壊と暗黒と苦勞と首吊り、斯ういふ幕を展開せんとして居るところの憐れな文明である。この暗黒を轉じて光明に來らしめ、争闘を轉じて融和に導き、不平を慰めて法悦に來らしめるといふ釋尊の努力の方が、どれ程人類に幸福を來すものかわからないのである。

さういふ風な考から見て行くと、釋迦如來の教といふものは、堂々とその思想問題の中に入つて邪説を粉碎して立てられた宗教である、そんな思想の事や學問の事はそれはまアそつちの方でやつて呉れ、こつちは隅の方で感情的に宗教をやる……さういふものではない、文明の中心に横つて居る誤謬を粉碎して進んだものである。

それは釋尊の教が應用に移つて、既に主張して居

無く終り無く貫いて居ることである。時間と空間のこの無限に對して、その際の際までを包んだものが即ち遍滿といふ語である。物事を考へるにはそこから行かなければならぬ、これが即ち哲學思想である。西洋哲學と言つても時間と空間といふことが本當にわかれば哲學の思想は半分以上了解することが出来るのである。普通の人は時間空間といふことがわかつて居ない、時間は始め無きものだと言つても、それでも何處からか始まつたやうに頭腦の内に起點を置いて居る、終り無しと言つても、何だか二千年か三千年の先に終りがあるやうに思つて居る、西なら西の際には無いと言つても、何處かに際があるやうに思つて居る。時間に始め無く終り無く、空間に邊り無く限無しといふこの偉大なる所、心をそこまで伸ばすと始めてフーツと息を吹いたやうな大きな精神がそこに湧いて來る。それから始めて哲學上の話が出来る譯である。

る異教徒に對し、時代に横つて居る謬見に對して矯正をされたのであるが、釋尊はモット／＼高い原理から教を立てたものである。それが今自分の語らんとするところの「遍滿、含著、中心」といふこの三大原理に基いて、一切の大事な事柄が説かれて居ると思ふのである。吾々不肖の者が釋尊の大智慧を窺ふといふことは恐懼に堪へぬことであるけれども、併し語らなければ何事も窺ふことが出来ぬから、釋尊の御覺りの一小部分を窺つて考へて見ると、この三大原則が即ち佛敎の一切の思想を構成するところの根本を成すと思ふのである。其の事の梗概を述べようと思ふ。

二、三大原理

遍滿といふことは一切に行渡つて到らざる處無しといふことである。空間で言へば盡十方法界、際の際までも及んで居ることである、時間で言へば始め

どころが佛はその遍滿といふことを非常に徹底的にお覺りになつて居つて、説かれる場合にもそれが原則に現れて居ることは、大事なお經に於ては皆能くわかつて居るのである。阿彌陀如來の事を説かれて居るお經などが方便だといふのは、それが時間に於ても十劫正覺であるし、空間に於ても西方に陣取つたといふことは、遍滿といふ思想から見て、到底哲學的範疇に於て立派なお經ではないといふことがわかるのである。この原則を能く呑込んで應用さへしたならば、一切經を縱横無盡に領解することが出来るのみでなく、すべて人類に於ける真理の解決といふものは迷ふ所無い譯である。

ところが左様にして時間空間に充實したる遍滿といふことを考へたわけでは、たゞ觀念が擴がつてしまつて纏りといふものが附かない。それ故にモウ一つ他の原則といふものは、擴げれば全宇宙に漲るのであるけれども、それが不思議なことには一と多

との關係といふものは、その絶對が有限相對の或るもの、上に含蓋せられるものである、不思議に多を含むことが出来る、さういふ萬有相圖の妙といふものが存して居るのである。それは如何なるものに就ても一と多の關係といふものがある。一番わかりの宜いのは人間の心が靈妙なものであるから、その一を取る時分には心を取つて「一心に法界を具する」とか、「一念に三千を具する」といふやうに、その非常な遍滿的なるものが一つのものに含まれるといふことを明かにして居るのである。それが總ての問題に就て同じ型で考へられて行くのである。その擴がつたものが擴がつた儘で少しも纏めることが出来ないといふことになれば、もはや吾々人間の意識には投映して來ないのである、擴がり切りであつたならばそれを吾々の心に意識することは出來ない、それが或るものに含蓋せられて來るといふと、その含蓋したる有限のものに於てその無限を見るといふ

便宜が得られるのである。

ところが左様にして或る一點に全體が包まれるといふことは、何處でも言へることになるけれども、その内に於て中心を立てないといふと、何處にでも含蓋するものであるといふことになればこれ亦分裂して、一切に一切を含むといふことになれば又やはり一切と同じ關係になる。一と千との關係で言うたならば、一から千までのものがどれにでも具する、一にも他の九百九十九を具する、五百といふものにも具する、五百一にも具するといふことになれば、やはり千まで行つて千にも他の九百九十九を具するといふことになるから、同じ關係になつてしまふ、一切の一に他を具すると言うても、中心といふものを立てなければ、その含蓋といふものは用を成さないうことになつてしまふのである。茲に於て單に含蓋を論じたわけではいかぬから、その含蓋に就てその中心といふものを明かにする必要が起つて來るので

ある。

それ故に眞理とは遍滿、含蓋、中心といふ三つを一括して、この三つの範疇を纏めたものが眞理といふことになるのである。普通の人が使ふ眞理ナンといふものは空想であつて、そんな深い考も無く語を操つて居るのである。遍滿といふことを意味しなければ眞理といふものではない、本當の眞理は遍滿して所謂絶對遍滿なものである。併し遍滿だけでは眞理ではない、それが或るものに含蓋するといふことを發見しなければならぬ。その含蓋を持廻つて居る間はまた眞理の結論に達して居らない、それに中心を押へた時、始めて茲に一つの眞理といふ語が具體化して來るのである。それを實際のものに當嵌めて考へて行けばヒシ／＼とわかつて來る譯である。

この遍滿、含蓋、中心といふ三大原理に就てもいさ少し詳しい話をしたいのであるけれども、時間の關係上先づさういふ概念だけを押へて置いて、これ

を大事な問題に引當て、考へることにして見たい。

三、宇宙と三大原理

第一にこの三大原理の法則で廣い宇宙を考へることになれば、無論全宇宙は前に申す通りに空間に於ても際し無く、これを世界で言うたならば世界の數はわからぬ、無数の世界といふものがこの全宇宙にはあるものとしなければならぬ。時間に就てもこの世界が始めがあつたといふことは言へない、この世界の終りといふものも無い。世界と言つてもこんな地球などに就て考へたならば、出來たり、壞れたりするものであるけれども、この大宇宙の状態を考へたならば、宇宙は始め無く終り無きものである、際し無きものであるといふことが考へられる譯である。これは一番考へ宜い譯である。そこで大宇宙は無始、無終、無邊、無際といふことがわかつて、始めて哲學の問題に頭が入るのである。

ところがさうやつてしまつた切りではどうにも斯うにも擴がつてしまつて頭の動きが取れないから、今度それを含蓄といふことに依つて或る事柄に引つけて考へるやうにして來るのである。その場合には何なりとも一つの有限なるものを取つて、その有限の相對の中に無限、絶對、通滿があるといふことを論證して來る譯である。さうするとこれは又實に不思議なる關係のものであつて、時間なら時間といふものを考へて見ると、時間の或る一點といふものは無限の時間と連絡を取つて居るものであるから、その一點の一セコンドの時間といふものが無限の時間と連繋して居るところの時間である。これをたい切離すといふとわからぬけれども、それは哲學的に本當に味ふとわかる。それが華嚴經などに出て居る事である、釋尊が成道を遂げられた最初瞬間の一念といふものゝ内に、無限のものを包括して居ることを説くのである。華嚴經七十卷の出來事はいろいろに

神變を現じて、實に廣大無邊の力用が現れて居るけれども、根本に還せば菩提樹下に端座する釋尊成道瞬間の一念であるといふことを示して居るのである。これは唯時計の一セコンド、カチツと言つた中に無限の時間があるといふことはチョット判斷が附かぬけれども、心の靈妙な作用を以て見るとそれがわかる。佛様の事でもわからなければ、夢などを見る場合はこれが餘程能く働いて來る、チョット眠つたと思つても、その間に非常に長い夢を見ることがある、随分舊い事から次へ／＼と夢を見て居つて、而もそれが傍に起きて居る人から見たならば、僅に五分か十分の睡眠の間であつたといふやうなことは能くあることである。そのやうに一瞬の時間に無限の時間を包括して居るのである。

それから物質の方に於ては一微塵に全法界の物質を含むといふことになるのである。これもチョットはわからぬけれども、物質の靈妙をだん／＼考察し

て行くと、如何なる物の中にも一切があることがわかるのである。先づ植木鉢などで考へると能くわかる、小さな植木鉢に土が少しばかり入つて居る中に朝顔の種子を播けば、それから紫の花も咲いて出れば或は赤い花も咲いて出る、それが朝顔だけではない、唐辛子の種子を播くと辛い唐辛子が取れる、いろいろ／＼な種子を播けば同じ土であるけれども違つた味ひが出て來る、色も出て來る、様々なものが出て來る。今日最も科學的研究に依つて物質の靈妙を知れるものは石炭である、あの眞黒な石炭から瓦斯を取る爲に瓦斯會社の工場をやつて居る所を見れば、石炭の油が流れてあのコールターといふドロ／＼した油になつて出る、それを集めて精製所に送るといふと、そのコールターからあらゆるものを製出して居る。東京では本所の東の方の大島町といふ所に精製所がある、一度参考の爲に參觀されたら宜からうと思ふ、それが佛敎を了解する参考になる。行つて見

るとそのコールターの中から先づ驚くのは眞白な白砂糖よりも綺麗な肥料が取れる、それを少しばかり植木鉢にでも入れ、ば非常に能く利く、大變調法なものである。それからやはり白い色をして居るホルマリンといふものがある、洋服などを納ふ時分にに入れて置いたり便所へ撒いたりする、あの眞白なものがコールターの中から取れる、それから石炭酸も取れば揮發油も取れる。それからあらゆる染料、メリンスを染めて居るところの紫でも黄でも赤でも青でも、何でも三十幾種類の染料といふものがあの眞黒なコールターの中から出て居るのである、呉服屋の店頭を飾つて居るところの絢爛たるメリンズ類に現れて居る總ての色は、眞黒なコールターの變化である。それから臭い香の物もあれば、又香水の上等も取れる。して見ると一つの物の内から實に様々なものが出る、石炭といふ石塊の中にさへも、紫もあれば青もあり、又香水もあれば非常に悪い臭ひの物

もあるといふことがわかる。それも人間の科學の知識が進歩した結果、石炭からそれ等のものが取れるやうになつたのであるけれども、モット知識が進歩したならば、それは灰の中からもいろいろ／＼なものが取れる、或は泥溝の泥からも様々なものが取れるといふやうなことはあり得べきことである。今までは泥溝の泥と言つて嫌つたけれども、この頃は泥溝の泥も四斗樽に一パイ七十錢もする……といふやうなことはあり得べきことだと思はれる。それは科學的に少しづつ人間の知識をやつて行くのであるが、これを哲學的に全體を考察すれば、所謂一塵一色一佛性と云ひしが如くに、石塊の中にも尊き佛性を具へるまでの眞理といふものが含まれて居るに相違ないのである。

斯様にしてこの宇宙といふものはやはり遍滿、含蓄といふことを考察する上に於て眞理が現れて來るのである。併ながらその宇宙の大事な問題を押へる

居る、佛教は多量に眞理に根據する宗教である。大本教とか天理教とかいふことになつたらそんな事は言へない、言うたら直に困つて來る、ズット初めを言うたならば、そこには三隣亡といふか、良の金神といふやうなものが出て來る。それが腹を立てたなどと言ふのであるが、そんな事はズツと後の話になつてしまふから、そこで時間の問題に於ても金神といふものが何處からどうして出て來たか、どうして腹を立てたかといふことになつて來ると、始めが壊れてしまふ。兎に角金神様のお氣に觸つたのちや、それで東京は一番に壊されるのちや……といふやうな事を言うて居るのであるから、その思想といふものは哲學思辨の上から見てまるで幼稚にして根據が無いことになるのである。佛教は何處でも始め無く終り無く不生不滅といふことを標榜して起つて居る。基督教なども直に神天地を造り給ふといふ起點を執らんとするから、彼は哲學的に落第する宗教

場合には、石炭の塊を中心にする譯にも、泥溝の塊を中心にする譯にも行かないから、そこで含蓄の中心を押へて來る時に、宇宙の問題に於ては人生といふものを押へて來て人間を捉へなければいけない。何處にも妙はあるけれども、人間を捉へてこれがどんなものであるか、これを大鳥精製所へ送つて精製すると、それはコールドターどころではない、モット變化の甚しいものである、石川五右衛門も出て來れば楠正成も出て來る。それは人間は一つであるけれども、往いて言へば佛様もあれば、地獄もあれば、一切のものをこの中に包含して居る、實にこれは妙なものだといふことになる譯である。

そこで先づさういふ風な意味合の事を考へて行く、佛教はこの宇宙の廣い事を法界盡十方と言つて、到る處に説いて居る、時間に於ては無始無終といふことを又あり餘るほど言うて居る、時間に就ては始め無く、不生不滅といふことも實に澤山言うて

である。看板に落第宗教といふことを掲げて居るものである、佛教は不生不滅を看板にする、これが哲學的眞理王として、世界の人類はさうしても之に據らなければならぬといふ、この看板の掲げ方で既に大勝利を得て居る。これが西洋にあつたならば彼等ほどの位誇るかわからぬ。吾輩が今言ふやうなことは女子供でも知つて居つて、吾々の宗教は不生不滅である、神宇宙を造り給ふナンといふ事がありますか」と言ふに相違ない、それを逆を喰つて居る。この立派な宗教を有つて居る東洋民族が、神宇宙を造り給ふナンといふ印度の婆羅門教の提灯持のやうな宗教の下を潜るといふことがあり得べきことではない。

そこで宇宙に就てはどうしても中心思想を明かにして來る爲に、先づ佛教の方では法華經に來て言へば諸法の實相、諸法は廣いものであるから、諸法のどれにでもその全體を含み、けれどもその中に於て

世間相——人間の世間を執つて、さうしてその世間相の中に於て人間そのものを問題にして、一切衆生と言へば生きとし生けるものであるけれども、人間を中心にして開佛知見を論ずるやうになつて居る。これが即ち遍滿、含蓋、中心といふ思想がハツキリ押へられて、諸法實相、世間相常住、開佛知見、舍利弗の得道、さうして歡喜、法悅、斯ういふことになつて、ちやんと遍滿、含蓋、中心といふものを外れないやうに説明されて居るのである。

その説き工合、その格といふものを頭腦に入れて置けば、何處までもそれに不合格のものは駄目だといふことが直ぐわかつて来る。佛敎はこの宇宙の説明が天臺大師に依つて完成せられ、即ち一念三千といふことになつて參つたのである。それは廣い宇宙を人間の世界に持來つて、その人間の中から一念といふものを押へる所まで來るのである。それは次に人間に就てこの三原則を應用して話して見たい。

合に於ては人間の非常な遍滿性といふものを説くのである。即ち一人の人間は全法界なりとして考へるのである。そこで擡げた切りではさつぱり纏りが附かないから、今度含蓋を取つて來る時に、今茲に個體を取つて居る自己なら自己といふものの中に、さういふ廣き宇宙を具へるものであるといふことを含蓋の方から論を起すのである。

その場合に一念三千論で考へれば最も明瞭であつて、一念三千論では總統、各統といふことを論ずるのである。總統といふ時には全宇宙を一つにして考へてしまふのである。その時には誰でも構はない、宇宙といふものと個人といふものとの關係を説明するのであるが、それを總括して一と多の關係を説くのであるから、總在一念と天臺が申して居る、總すと一念に在る。その一念とは誰の一念と言ふことが言へないから、大阿頼耶識と言つて大きな宇宙生命、この頃西洋人の言つたりするところの宇宙の大

兎に角佛敎の方ではさういふ風にこの廣き宇宙に遍滿、含蓋、中心といふことを應用して諸法實相論といふものが完成されて居ると思ふのである。故にその意味合から今度人間にこれを應用して考へて見たならば一層明瞭になるのである。

四、人間と三大原理

人間を説く順序も必ず遍滿の側から説明するのである、人間そのものは決して始めあり終りあるものではない。さうしてそれは十界具足の妙體である、單なる人間ではない、人間といふものは一切を含んで居るものである。三千法界悉くこれを具へて居るものである、人間に地獄もあり、餓鬼もあり、畜生の火の燃える世界を生み出すところの、さういふ衆生世間、五蘊世間、國土世間、これ皆具するものであるといふので、これを人間に依つて説明する場

生命——宇宙の大生命ナンといふことは遍滿的に考へた時に言ふのである。この宇宙の大生命と個人の小生命と違ふものではない、個人の小生命の中に宇宙の大生命があるといふことになつて來なければならぬ。而して總在一念といふことを天台が言ふ時分には、これは總統的に論ずるので、その一念は誰の一念でもない、所謂宇宙の大生命、大阿頼耶識を執るのである。それでは論が盡きないから今度各統的にどれにでもあるといふことを言ふ、その時分には人間の心にはかり限つては居ない、「一色一香中道に非ざる無し」と申して、香にでも一つの物質にでも皆全宇宙を包むことを説いて居る。それが今度は人間のの上に來た時には誰にでもあると申すのである。それはモウ地獄にでも餓鬼にでも何處にでも全體を包むものである、併しそれではやはり本當の眞理の押へ所が附かないから、だん／＼研究して行つて一念三千といふこの人間の心、而もその一念の中に三

千法界の全體を具へることを教へるのである、そこで一念三千と言ふ。この一念三千といふ語は遍滿と含蓋と、含蓋の中心といふことを考へた時に、一念三千論といふものが完成する譯である。

而してその一念は同じ一念といつても澤山ある、その中のどつちを探るか、善い者もあり、悪い者もある、靈智と申して、淨い、覺りに近いやうな澄み切つた美しき考の中に一切があるといふその靈智といふものを探るか、陰妄といふ、即ち迷うた方の、彼奴は憎い、殺してやらうといふやうなその考の中にあるのを探るかといふことが、所謂中心の押へ所に於て大議論が起つた。遂に天台學の正統としては陰妄の一念を探らなければいけない、淨い一念の中にあるといふことは中心の押へ所としてはいけない、吾々の惜しい、欲しい、可愛い、憎いと考へる一念のどれにも一切を包括するものである。併しそれだけでは議論の中心が盡きないから、今の心何れ

に適くやといふことである、惜しい、欲しい、可愛い、憎いに具つて居るといふだけではまだ客觀的の議論になるから、現在今の自分の心、今考へて居るこの心、その一念に一切を包んでしまふから、今憎いと考へれば一切天地宇宙は憎いといふ考に於て包まれてしまふものである。さうすれば即ち天地宇宙は地獄になる譯である。可愛いと考へた時はその優しい精神が宇宙を包むから、その可愛いといふ慈悲の精神に包まれた時、宇宙は極樂の世界を實現するものである。斯ういふ風に今の心何れに屬するやといふことに就てその中心を確かり押へて居る。多くの法華經學者のやうに唯だ一念三千を説き放しにしない。それ故に天台は一念三千を語れば背に汗するといふことを申して居るが、これが實に尊い所である、斯ういふ事を語りつゝも今自分の心が間違つた考の方に行つて居れば、直ぐその一念の内に宇宙を包括して、その精神が主となつて働かぬが故に、只

今の心何れに屬するかと考へた時、背に汗せざることは稀であると天台智者大師は懺悔して居る。それは實に尊い所謂中心の押へ所であると思ふ。そこへ行つて今の心何れに屬するやといふ中心を推へて、始めて一念三千論の眞理といふものが完成を告げるのである。その押へ所をいゝ加減にして置いて、一念に三千を具するからごんな考にも皆具すると言つて、客觀的に説き放して棄て、しまつたならば、それは遍滿、含蓋を論じて、中心を未だ押へざるところの思想といふことになる、それは議論の餘地が残つて居る、眞理の大事な所を逸して居ることになる。

日蓮聖人の教はそれをモット能く押へたのである。陰妄の一念でも宜いけれども、それは觀念觀法に依つてさういふ心の中にも一切があるといふことを消化して行く力、法華三昧の觀念觀法の行成就の力を要するものである。左もなければボカンと

そんな事を考へただけでは何の効能も無い、深く徹底してこの考の中に一切を支配する力ありといふことから、それを領解し、それを覺り、それを應用して、さういふ實力がその強き觀念觀法の中に生じて來なければならぬが、それは吾等の及ばざる所であると日蓮聖人は仰しやつた。

さうして唯だ陰妄の一念に一切があるといふだけでは理論上の問題に終つてしまふ、まだ中心の押へ所が足りない。釋尊がこの偉大なる眞理を吾等の前に與へられたといふものは吾等を教はんが爲である、吾等も亦法華經を信仰する所以といふものはこれを弄ぶのではない、希くばこれに依つて眞にその覺りを得てさうして救はれなければならぬといふ熱烈なる欲求を有つて居るものである。佛は慈悲の心を籠め、吾々は解脱の心を籠めて茲にこの大慈悲に向つて居る譯である。それ故にさうなるとこの一念、それは如何なる念の中にも三千を具するけれど

も、日蓮の解する所に於ての中心は、この法華經を
通すところの信解信念である、この信念に尊き佛樣
を具へ、尊き佛の覺りを與へられるといふことに歸
着しなければならぬ。それが本尊鈔にあるところ
の、

私に會通を加ふれば本文を讀すが如しと雖も、
釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具
足す、我等此の五字を受持すれば自然に彼の因
果の功徳を譲り與へたまふ。(九三八頁)

こちらの方では受持の一念を執り、相手の方では廣
い宇宙を釋尊の因行果徳の功徳に纏められた、何も
のをも得られるけれども、我が得んとするものは釋
尊の因行果徳の功徳である。我がすべての心に一切
を具するけれども、他の心を以ては効力が無い、釋
尊を渴仰して南無妙法蓮華經と信念するその信仰の
一念、さうして何ものをも得られるといふけれども
も、他のものは第二第三で宜しい、どうしても得な

て、始めて法華經の人身觀といふものが有難くなつ
て來るのである。斯ういふ順序で法華經は説かれて
居る。

五、佛陀と三大原理

次に佛陀と三大原理を考へて見ても、やはりこれ
が大きな問題である、佛樣は遍滿に一致して居るも
ので、自由自在に時間空間の内に遍滿せられる方
である。併しそれが廣がつたばかりでは用を成さない
から、その中から含蓄の有限の佛身を現じて衆生を
濟度せられる。それも亦無限にして澤山に應現せら
れて居るが、その應現が切れぬになつて、いろ
々な佛に應現して、どれが中心かわからないこと
になれば分裂したる佛敎となつてしまふ譯である。
それ故に遍滿の如來、含蓄の如來を今度更に中心の
如來として考へる問題が起つて來るのである。それ
を最も能く説明したるものが如來壽量品である、こ

ければならぬのは釋尊のお有ちなされて居るところ
の因行果徳の廣大無邊の功徳を、我が信念の中に譲
り與へられて、さうして我が成佛を誤らなく遂げる
といふこの希望を籠めたる精神の一念に、遍滿、含
蓄、中心の信仰を置くといふことになつて居るので
ある。

そこに至つて一念の中には何もかもあるといふけ
れども、そんな他所の話をすることは要らない、今
吾々が信仰し奉るこの信念の中に、さういふ大きな
眞理が手傳うて釋尊の功徳を譲り與へられて成佛疑
ひなしといふことになるのである。これは吾々の熱
烈なる感情的信念のやうであるけれども、この感情
的に見える信念を周圍からこの三大原理の眞理が擁
護して、我が信仰、我が成佛を保証して居るもので
ある。この大眞理に承認せられたるところの信念で
ある、單なる感情的信念ではない、大眞理と一致し
て居るところの情操感懐であるといふことになつ

の如來は時間を貫き、空間を貫き、三世に十方に遍
滿せる活動を爲すものである。而してそれが今現れ
て居る釋迦如來の上に含蓄せられて居る、それから
身を分けて十方に又無始無終に働いて居る、その
中心を今法華經を説きつゝあるところの娑婆世界出
現の釋尊に於て定められたのである。遍滿、含蓄、
中心といふことを目標にして最も能く説き切つてあ
る、その意味を以て如來壽量品の全文を順序能く考
察して行くといふと、如來壽量品は遍滿、含蓄、中
心といふことを最も能く領解せしむべき順序に經文
が説かれて居るのである。他のお經はさういふよう
い譯に行つて居らない、方便品が壽量品に及ばぬと
いふのは、その順序がさういふ工合に行つて居な
い。諸法實相に就て世間相當性を説いたことは宜
いけれども、釋尊に就てはさういふ所まで行つて居
らぬから、そこで壽量品に及ばないものである。
併しながら壽量品から立還つて一切經を見ると、遍

満、含蓄、中心の思想といふもの、一部々々はすべて現れて居るのである。華嚴經に釋尊の力用の偉大なることを説かれて居るが、それは何の爲かといふと、やはり今覺りを開かれたこの釋迦様は廣大無邊の力用を有つて居られる、非常な遍滿的な方ちやといふので、所謂盧遮那佛、又名は毘盧遮那佛と言つて居るが、毘盧遮那は遍一切處と言つて遍滿である。その遍滿の意味合に於て何處にでも釋迦如來は活躍して居られぬ所は無い、だから一つの蓮華座の内の千葉の蓮華に千の釋迦牟尼あり、眞ん中の蓮華の中央に又釋迦牟尼大世尊がござつて、さうしてそれが皆蓮華藏世界と言つて、實に廣大無邊の活動をして居る、これは遍滿、含蓄といふ思想を現す爲に、所謂千葉の蓮華、或は中心の大釋迦といふものが現れて居るのである。さうしてその御心の力用に就て言へば、或道一念の心の内にあの廣大なる神變を現じ、説法を爲し、あらゆる八十卷に亘つての大

て居ることである。今日日本人の用心の仕方は洵に貧弱になつて居つて、泥棒の用心、火の用心といふやうな事だけに用ひられて居るけれども、そんな粗末な語ではない。華嚴經で言ふのは、自分が夜寝ようとするれば、自分は安かに蒲團を敷いて寝るが、蒲團を敷くことの出来ない人間が世の中にはあるだらう、自分は安らかに眠るが安らかに眠り得ない人があるだらう、自分は今大した心配は無いけれども、非常な苦惱を懷いて輾轉反側眠り得ざる人もあるであらう、一々心配し切れないけれども、どうぞそれ等の人も自分の心得なり佛様の救濟なりに依つてその苦惱より解脱致しますやうに……南無妙法蓮華經と唱へながら寝て行くといふやうな氣分がズツと説いてある。朝顔を洗つて氣持の良い時でも、夜が明けても起上つて顔を洗ふことの出来ない病人もあるであらう……自分が自動車で心持良く走つたならば、重い荷車を挽いて行く人のことを思へば有難い

作用がある、實に廣大無邊なものである。さうして宇宙觀に就ては一毛端に三千界を轉ずるとか、心に就ては一念に三世を包み一心法界に遍しとかいふ風に、一多相即といふことに就て華嚴經は圓融無礙を説いて居る。それは今の遍滿、含蓄といふことを哲學的に最も明瞭に現したものが華嚴經であつたのである。

さうして大體は何處まで行つても、佛に就ては釋迦如來を中心にして考へ、人間に就てもやはり心の事を能く教へて、心は巧みなる繪師の如く、繪師が一本の筆から鬼でも佛でも何でも描き出すが如くに、人間一心の作用より一切が出て来る、その心の作用を慎まさんばあるべからず、往いて言へば今の心何れにありやといふ用心——心を用ひるといふことに就て、何處へ用いて居るか。この用心といふ語は華嚴經に澤山説いてある、俗に火の用心とか、泥棒の用心とかいふこの用心といふ語は華嚴經から出

事だと感謝しなければならぬ。さういふ風に如何なる場合に於ても一々人間の心を善用することが説いてある、往いて言へばやはり遍滿、含蓄、中心の心掛けが華嚴經の教義の大原則を或すのである。

法華經の佛身觀は屢々語つたが如くに、結經の方に於て言へばやはり「釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名けたてまつる」とあつて、毘盧遮那は遍滿である、その遍滿の佛が今釋迦牟尼佛と具體化して有限の佛になつて居られるのである。さうしてそれが中心で十方の諸佛が皆集つて來て居る、十方の諸佛は寶塔頂にあるが如くに分身の如來である、斯ういふ思想がズツと法華經の全體を造つて居るのである、佛身觀に就ては最も能くその意味が現れて居る。小乗教で言へば時間の中心に於ては釋迦牟尼佛を考へて居る、物事は一遍に考へられないから、時間、空間といふもので一切が終るのである。そこで小乗の方では時間的に三世を考へた中に、現在の佛は釋

迦牟尼佛である、過去の七佛は涅槃し給うて吾々と直接に縁が無い、未來の彌勒は未だ出現し給はない、どれ程の距離があるかと言へば五十六億七千萬年遙かなり、逆も待切れない、彌勒の出現といふけれども、釋迦の次に出来るのは五十六億七千萬年経たなければ出ないと言つたのは、何が故にさう言つたか、そんな永い事を言はぬでも一萬年か二萬年と言つて置けば宜いのに、五十六億七千萬年経たなければ後の佛が出ないと説いたのは、釋尊を中心にして渴仰しなければならぬといふことを教へて居るものである。今度一遍ぐらゐり損つても、佛といふものは次から次へ出られるから安心だといふやうに油断をしてはならぬ、今度やり損つたら五十六億七千萬年待たなければならぬぞといふことを教へられて居るものである。即ち小乗教が釋尊を時間的の中心に考へたといふことは、遍滿、含蓋、中心の思想といふものが、やはり阿含經と雖もであるものである。

うな話である。だからさういふ事に氣を取られないやうに、一切經といふものは他に佛を説いても、娑婆世界の衆生は釋尊に依つて救はれるものだ、縁といふことを佛教では説くのであるが、娑婆世界の衆生は釋尊に縁がある、有縁の佛として釋尊が出現せられた譯である。縁有つて夫婦になつたら、それが女房といふことになる、幾ら美しい女だと言つても、十萬億の佛國土の向ふに居る間は縁が薄いと云はなければならぬ。釋尊は面のあたり吾々の足を以て踏み得る印度の地に降誕せられた、印度は遠いと言つても船に乗つて行く人は澤山ある、ところが阿彌陀如来の國に行つた者は一人も居らぬ、どんな船乗りでも飛行機乗りでも行けない、釋尊は吾等人類の足を以て踏み得べき地上の人として降誕せられた。であるから廣きこの宇宙の空間の中に於て、娑婆世界の衆生を救はれるべき因縁を有つて居る、中心思想といふものは釋尊が娑婆世界に出現せられるといふ

その他のすべての大乘教はどんなお経であつても、阿彌陀經でも樂師經でも一切經は、空間といふ廣がりの中に於て、横に盡十方法界を考へた時、澤山の世界、澤山の佛ありと言つても、娑婆世界は教主釋迦牟尼佛の化導に屬すべきものである、一切經はあつても娑婆世界の教主釋尊といふことを侵した所は何處にも無い。阿彌陀如来を説けばこれ西方淨土遙かなり、その間は十萬億の佛國土を過ぎて西の方にあると説いてある。その間の一つの佛の世界といふのはどの位の世界かと言へば、三千大千世界を一佛化境と爲すと言ふ、三千大千世界とは、今の地球のやうなものから見たら、百億の須彌、百億の日月を言ふのである、その百億の地球を三千大千世界と言ふ、これが一佛化境としてある。それが十萬億あるといふのだから餘り近いことはない、船に乗つて迎ひに来ると言つてもその方に氣を取られることはない筈である、飛行機で來ても五十年や百年は費りさ

ことできまる譯である。それを徹底的に説いたのが壽量品である、時間を貫いて三世、空間を貫いて盡十方、「那由佗阿僧祇劫、那由佗阿僧祇の國に於て衆生を導利す」、而もその絶對本佛が今汝等の前に現れて法を説きつゝあるものぢやと仰しやつたのである。斯様な大真理を以て釋尊の尊さを説明されて居るものであつて、これから出てあらゆる佛法の修行、佛法の應用といふものがある譯であるが、先づ佛教が理教相離れざるものであることを知り、又三大原理を心得て、遍滿、含蓋、中心といふことを能く消化して、その觀念を以て吾々人間の事を考へ、宇宙を考へ、佛様を考へるならば、それが即ち法華經であり、それが一切經の根柢を成すものであつて、この合理的なる大宗教が東洋は無論のこと、往いては世界の人類を救ふべきものである。斯ういふ大きなものはなか／＼調査會などを開いたとて出来るもの

ではない、又間に合せな議論を以て壞すことの出来るものではない。これは眞に偉大なる人類文化の事實であつて、東洋に於てはこれぞといふ偉い人は皆釋尊の前に拜跪合掌をせられた、日本の聖徳太子、支那の唐の太宗、印度の阿育大王、その他の學者、高僧、釋尊を拜跪して居る者は算へ切れない位である。西洋人もだん／＼釋尊の偉大を認めつゝある、世界が釋尊に拜跪するの日は必ずや遠くはない。西洋人の慢心が除れて、基督教を奉ずる國が文明國ちやといふやうな下らない考を捨て、世界の文明を公平に考察しなければならぬといふことになつたらば、基督教と佛教との優劣を見分ける位のことには西洋人と雖も餘り困難ではない。自分の知つて居る一、二の西洋人は皆釋尊の偉大を認めて居る、嘗て歸一教會で講演した時分に、リニューリツク先生は「佛教はさういふ尊いものでありましたか、私は知らなかつた、自分は二十三年同志社の神學教授として基

督教を日本に宣傳すべく人物の養成に盡したが、こんな立派な教があるならば、何も別に日本に基督教を宣傳する必要はありませぬ」と言はれたが、實にリニューリツク先生は偉い人である、それより亞米利加へ歸つて、さうして亞米利加の排日運動に對して、日本人は排斥すべきものではないと言つて日本を紹介して、亞米利加人の誤解を解くべく今尙ほ努力して居られるのである。その後又亞米利加から大學教授で宗教を専攻して居る人が来て、いろ／＼佛教に就て質問を受けた、その時にもいろ／＼話したが、實に佛教は聴けば聴くほど感ずるに堪へたるものであると言つて居つた。

又日本の學者でも有名な法學博士で、基督教の方では有数の人であるが、この人も吾輩の話を聴き、大藏經要義なども買つて讀んだ結果、自分は佛教を知らなかつたものであるから基督教に來たけれど、青年の時分から佛教をやつて居つたならば自分

は基督教に行くのではなかつたとハッキリ言うて居る。又有力な實業家で基督教をやつて居つた人が、大藏經要義を讀んで非常に感して自分の故郷の大分縣の寺に圖書館を拵へたりして、いろ／＼佛教の爲に盡して死んだ人がある。それ等の人の事を考へると、佛教を知らずして皆基督教に行つて居つた、佛教を心得て居る者が佛教を捨て、基督教に行つたといふやうな人は無い、基督教にはどの位精通して居つても、佛教を學べばより以上のものがあるから、その方に思想は向いて來る譯ナンである。現に有數な二三のクリスチャンの人と語つた事もあるが、「イヤ實は佛教を知らずにやつて居つた」と言つて、人の居ない所で自白するやうな人は幾らも居る譯である。

左様な譯であるから決して日本人が佛教を輕んじてはならぬ、大に學んでその意味合を發揚しなければならぬ。それには現在の流弊多き佛教ではいかぬ

から、どこ迄も佛様の爲されたる根本に戻り、時代の要求を考へて、理想的に改善せられたる佛教を以て一切衆生の爲にこれを宣傳せなければならぬと思ふのである。諸君は不思議なる縁有つて尊き教に近づかれたのであるから、どうぞ熱心に法を聞いて本當の正しき信仰を持續して、自らも教はれ、世にもその法を傳へて、一切衆生の爲に佛様の御仕事をお手傳ひ申上げるといふ高潔なる精神に依つて、益々奮勵努力せられんことを切に希望する次第である。

(完)

受はやすく持はかたし、さる間
成佛は持にあり、此經を持たん
人は難に値ふべしと心得て持つ
なり、

日蓮聖人 四條鈔

天風三萬里紀行 (其十二)

小林日種

十一、萬壽山、碧雲寺

五月廿八日

朝、中村桃太郎君夫妻が来て私の寢込を起こした。

「今日は君を何處かへ案内しやうと思つて、來たのだ。」

中村君は私の同郷の友人で朝日新聞の特派員として當地に駐在して居るのである。

私は急いで驛を洗つた。

「何處へ行こうか。」

「何處でもいい。」

「天壇も國子監も、雍和宮も君は皆見てしまつたから何處がいか僕には分らない、萬壽山は行つたか。」

「いや知らない。」

「ぢやあ萬壽山とさめよう、そして行かれたら碧雲

寺へも行かう。」

中村君は綺麗な自動車を携えて來たのでそれに乗つて井上君宅を出た。市街地を通り抜け、正直門を通つて城外へ出る、中央に石を鋪いた平らな道が、どこ迄も續くのである。王城より萬壽山に列る此の三十支里の道は、西太后の豪華なる行列が絶えず往復した道である。處々に農家は有るが、人家は割合少く概ね、畑や雜木林や竹林などで見る限り長閑な景色である。

それに空がよく晴れてゐた。底抜のした程蒼く、無垢で、新鮮で生々してゐた。窓から見上げてゐると、甘いやうな、嬉しいやうな心持になつて來た、そして身體が軽くなつて果しない空に飛翔しはしないかと思はれ「飛去飛來落誰家」の劉廷芝の句など思ひ浮べ乍ら浪漫的な空想を描いてゐた。と、忽ち豁然たる景色が我々の向ふに廣がつた。

山風に鳴つてゐる松の間、岩山を繞らした谷々に在る赤い屋根だの黒い屋根だの、形のいい美事な建築が一樣に湖に影を映じて並んでゐた。

——これが昆明湖である。そして草色の薄い小山が實に萬壽山であつた。

私達は頤和園の扁額を掲げてある南門で自動車を棄て、廂房の售票所で入場券を購ひ中へ入つた。二つの小門を過ぐれば、臣下に謁見を賜ふ場所であつたと云ふ仁壽殿があり、その左を廻つて松柏の木立を過ぎると、玉潤堂があり、その前が直ぐ昆明湖畔である。水を隔て、湖心に龍王廟に向つて架せられてある蓮華橋は柱や欄干が皆寂びた丹塗りで、周圍に蔓る柳や楊と多少不調和な氣がする位、支那風に風雅を極めてゐた。私はこの橋の姿が、微かに青んだ空をうしろに、視野に現はれた時、思はず微笑せずにはゐられなかつた。

湖に添ひ石の階段を上ると樂善堂に達する。堂の後方は即ち西太后の便殿で、西澈月門を入り長廊下を上つて行く風光も又なく良い。西太后在世の日、綾羅を飾つた美人と伶人どがこの廻樓を踏んで遊歩

した光景が憶はれる、廻樓は凡て丹碧を用ひた頗る贅澤なもので欄間や天井には凡て五彩を以て花鳥山水を畫き、餘りに絢爛に過ぎ、もう少し古みを帯びてゐても差支へないと思ふ氣がした。所々に留佳亭や、奇瀾所の設けが有り、巒々六町餘、飽く迄も湖面に添ふてゐる。雲錦殿、玉華殿、排雲殿、紫霄殿、芳輝殿等は、廻樓の左手に聳立し、芳輝殿から更に階を拾ふ事九十餘級にして一門に入り、更に北して小階を上れば寶雲閣がある。一屋皆銅造りで少しの材木をも用ひてゐない、障子から机迄凡て銅と云ふ豪華振りである。

其處より右に折れ、縦横に通ずる石階を縫ふて上れば佛香閣の西側に出る。

閣の内部の壁は桃色で、桃色を背景にして金色燦たる巨大な佛像が三體奉安してある。桃色と金と——かう云ふ色の配合は妙に肉感的な所があるだけ、如何にも西太后の好みらしい。

閣から見下した風景は何とも云ひ難かつた。畫のやうな勝景を稱し乍ら用意の行厨を開いてパンを喫した。脚下に展開する繊細にして雄大なる景は、實

に自然と人工との調和の極致を現はしてゐる。聞くところによると、全然人工で、昆明湖を開鑿した土を累積して萬壽山を造つたと云ふ事であるが、これだけの雄大な構想を思ひついた當時の明朝の人々の文化生活の高き水準が思ひやられる。

排雲門から廻樓傳ひに西に出ると、秋水亭、清遙亭が有り、更にその西が寄瀾堂である。有名なる石舫がその傍に浮んでゐる。石舫はその名の如く大理石の船である。船から昆明湖を一眼に見渡す景が又良い。

玉泉山の白塔も遙かに蕩落し、西山の翠微も湖中に融け込んでゐる。

私達は其處から畫舫に乗つた。水は何處まで行つても深くはない、一定の深度を保つた清澄な水で、萍の漂つた水面から蓮の芽を出した水底が見え、その水底に鯉のやうな魚が無数にスイ〜と游泳してゐた。

萍と船底の擦れ合ふピツシヤ、ピツシヤと云ふ音が楽しい囁きとなつて、耳から胸へ、胸から體軀全體へ軽く響き互る。岸邊に廻つて一面に生えてゐる

禁酒運動と信仰

顯本教報二月號に「禁酒運動に就て」と題して左の記事が掲載されてゐた。

大阪立正結社支部の社員山本龜太郎氏は熱烈なる禁酒運動の實行家であり、昨年五月三十日附を以て上田、京藤、和井田、友廣、平山、橋、熱田、大庭、渡邊、清原諸氏の賛成を得て左の建議案を宗務廳に提出し宗務廳は同年六月二十八日附を以て其の徹底を期し趣旨に添ふ様その回答をして居る、畢竟本問題の如きは形式より實行に効果を擧ぐべき事と確信致します、依て宗内僧俗諸氏に於ても此の建議の趣旨を貫徹する様御盡力を懇望致します。

建議案

昭和三年六月五日より八日まで我國最初の宗教大會を神佛基三派合同の下に東京青年會館に於て開催し左記三議案が満場一致可決さる。
一 各教宗派を通じ二十五歳以下の禁酒法實現に努力すること

淺緑の蘆の葉が光を返し、人の魂をその中へ吸ひ込む。心を引きしめられる心持、固く唇を結んで見張る心持、それは昆明湖の奥へて呉れる命である。否、それは萬壽山全體の驕慢な外客に與へる心の鞭である。夫れは或る人に取つては壯大の象徴として、或る人に取つては絢爛の象徴として、又或る人に取つては調和の象徴として眺められる萬壽山の景を、デツと凝視するなら、一見、慢罵に値するやうな支那人の生活の中に、到底我々日本人の企及し難き、大きさと深さのある事を感得せずには居られないであらう。(此項未完)

編輯子曰く 小林師は曩きに十ヶ月餘に涉り支那印度等を歴遊されしが、更に官廳の囑託並に宗務を帯びて外遊の序に海外興業會社の委託に依り去る五月廿六日神戸解纜の移民船伊豫丸に便乗し千餘名の移民輸送監督を兼ね南米東海岸に向ひ出帆さる。夫より北米に出てバナマ運河を通過し大平洋岸に沿ひて順次北上し布哇を経て歸着の壯舉に對し航程の多幸と健康を祈る。

二 各教宗派の會合に酒類の使用を廢し良風の作興に努力すること

三 毎年九月一日酒なし日と定め神社寺院教會に於て之に關する説教講演を行ふ事

右三議案御採用相成宗内寺院へ布達と門下の月刊雜誌に記載方願上候

昭和四年五月三十日

立正結社大阪支部

上田 智 量

(外十名連署)

顯本法華宗宗務廳御中
越へて翌月二十八日附を以て宗務廳より上田智量殿外御中として左の回答が發せられた。

昭和四年五月三十日附を以て建議案提出相成候禁酒に關する件は誠に社會問題解決の一大良策にして時宜を得たる良案と信じ候に付建議の御趣旨を門末一般へ布達し其徹底を期し御趣旨に添ふ様致候に付此段及回答候也

然るに是が實際上に於ては履行されて居ない遺憾な點があると山本龜太郎氏より當所へ御通信があつ

て、統一の讀者の人々にも禁酒思想の普及を熱望されて居る、奇特の事と感謝の意を表します。

教主釋尊は酒の害毒酒から来る過失罪惡に關しては處々に訓誡を垂れられて居る、則ち

酒は不善諸惡の根本なり若し能く是を除斷せば則ち衆の罪を遠ざく (涅槃經)

其れ酒を飲む者は六種の失あり、一には財を失ふ

二には病を生ず 三には鬭爭す 四には惡名流

布す 五には悲怒暴かに生ず 六には智慧日に損

(長阿含經)

更に詳細なる飲酒の二十四失や三十六失が妙法聖念處經や分別善惡所起經に示教されてゐる。曩きに禁酒國北米から態々其の宣傳の爲めに渡來し偶神戸で大講演會を開催した時に、本多日生現下は佛教より見たる酒の三十六失を擧げて長廣舌を振はれたが米人は驚歎し賞讃し深く佛教の深淵であり徹底せる事を始めて知り敬服したと申すことであるから緊を厭はず左に其一節を示さう。

佛の言はく、人世間に於て喜んで酒を飲んで酔へば三十六失を得、何等か三十六失なるや、一には

一には酔へば便ち家室を視ること罪四の如く語言口を衝て出づ 二十二には惡人を朋黨とす 二十三には賢善を疏遠にす 二十四には酔臥して覺むる時は身體疾病の如し 二十五には酔へば便ち吐逆し若くは惡露出で妻子すら其所狀を憎む 二十六には酔へば便ち意前薄せんと欲し象狼も避くる所なし 二十七には酔へば便ち明經の賢者を敬はず道士を敬はず沙門を敬はず 二十八には酔へば便ち姪妹にして畏れ避くる所なし 二十九には酔へば便ち狂人の如し人之を見れば皆走る 三十には酔へば便ち死人の如く復讞知する所なし 三十一には酔へば或は垢面を得或は酒病を得正に萎みて黃熱す 三十二には天龍鬼神皆酒を以て惡と爲す 三十三には親厚の知識日に之を遠ざく 三十四には酔へば便ち踳踖して長吏を視或は鞭にて打れ兩目を合す 三十五には壽盡るの後當に太山地獄に入り常に銷銅口に入り腹中を焦し過下し去るべし是の如くして生を求むるも得難く死を求むるも得難きこと千萬歳なり 三十六には地獄中より出て來り生れて人と爲るも常に愚癡にして識知す

人酒を飲んで酔へば子として父を敬はず臣として君を敬はずらしめ君臣父子上下あることなし 二

には語言亂誤多し 三には酔へば便ち兩舌多口す

四には自らと人との伏匿隱私を道ふ 五には酔

へば便ち天を罵り社に尿して忌諱を避けず 六に

は酔へば便ち道中に臥して復歸ること能はず或は

所持の什物を亡ふ 七には酔へば便ち自ら正くす

る能はず 八には酔へば便ち低仰横行し或は溝坑

に墮つ 九には酔へば便ち倒頓し復起き身體を破

傷す 十には賣買する所謬誤し妄りに觸抵す 十

一には酔へば便ち事を失ひ治生を憂へず 十二に

は所有の財物耗減す 十三には酔へば便ち妻子の

飢寒を念はず 十四には酔へば便ち喚罵し王法を

避けず 十五には酔へば便ち衣を解き褌袴を脱ぎ

裸形にて走る 十六には酔へば便ち妄りに人の家

中に入り人の婦女を牽き語言干し亂れ其過ち無狀

なり 十七には人其傍を過れば與に共に鬪はんと

欲す 十八には地を踏んで喚呼し四隣を驚動す

十九には酔へば便ち妄りに蟲豸を殺す 二十には

酔へば便ち舍中の什物を過撫し之を破碎す 二十

る所なし今愚癡にして識知する所なき人あるを見るに皆故世宿命より酒を喜み嗜むの致す所なり、是の如く分明なれば亦酒を慎むべし。

然かも其後に於ける佛教徒はどうか、東洋の豪傑は酒から生れた妻にも見へる、北米合衆國が毎年何億弗といふ巨額を投じて禁酒を徹底せしめんとしても其の反響は却て一部に彼等の思想惡化品性の不良を示しつゝある事實を見たのでリテララー・ダイヂェスト誌は先頃禁酒可否投票を一般に行つた結果

禁酒法強制維持賛成 九一五、六八三

禁酒法修正賛成 九五一、三七五

禁酒法廢止賛成 一三〇八、八一六

斯の様な現象は何から來るか、則ち我等の考へねばならぬ點はそこにある、經濟難生活苦に喘ぎつゝも猶酒杯を離し得ざる者が目に充つてないか、宗門から通牒が發せられても徹底せざるは何故か、是れ形式上より所謂小乘戒に重きをおく爲めでないか、そこに進んで心に自覺を與へることが先決でなければならぬ、意に戒を持つ大乘精神換言すれば信仰に醒めしむることが何よりも肝要である、信仰が與へら

る、同時に自己の責任の大どわが微力な事こそ慚愧
至極であり深き懺悔に合掌して筆を置く。
(滿生)

記事

J O A K だより

ラヂオの放送開始より五周年の今日豫想以上の急速の發展を來
し、かの娯樂時代は早くも過ぎ去つて今日實用的のものとなつた。
幸にも五月十一日午前十時より「佛教の本質と其價值」と題して總
裁本多親下の修養講話が全國數十萬の人心の家庭に聞へたであら
う。左に當日の御講話の大要を掲げて再び讀者の御感想を新にした
い。

佛教の本質は人間の本體と人生の實相とを明かにし宇宙には超人
的資格者たる本佛の實在を認め吾等の信仰と本佛の慈悲との感應
を信じ精神的生活の法性を得、其處に道義的感懐を養ふて過を改
め善を行はしめ、此の教化を以て人類文化の一大要素を成してゐ
る。孔子は「憤を發して食を忘れ樂んで以て憂を忘れ老の將に至
らんとするを知らず」と云つてゐる、道義的修養に於て樂んで以
て憂を忘るるに至るのは容易な事でない、三千の子弟の中で顔回
一人だけ曲げて枕とす樂み其中に在り云つたに過ぎない。佛教

れた時こそ心に満足を生じ満足はやがて歡喜となり
歡喜は菩薩の道へと精進するであらう、釋尊は「酒
に多失あり放逸の門を開く」と教へられたが續て「若
し病苦を消すに用ふるは先の斷する所にあらず」と
仰せられ運用の妙を與へられた、併し底下の凡愚は
此の妙用を謬るからして一層最初から禁ぜんに如く
はなしとするが奮ふ前に先づ與へることが大切であ
る。信仰を與へよ、彼等を法悦に浴さしめよ、正信
なき國家は必ず滅ぶ、信仰は智慧を生ず、優婆塞戒
經に「戒に三種あり一には「世戒」二には「第一義
戒」なり若し三寶に依らずして戒を受ければ是を世
戒と名く是の戒の堅からざることは彩色に膠なきが
如し、是の故に我れ先づ三寶に歸依して然して後に
戒を受く」と世戒は懷れ易い、守り難い故に禁酒運
動も寔に結構であるが更に之が徹底を期すには信仰
を中心にするのである、彼等の手より杯を奪ふ前
に先づ信仰を與ふれば自ら杯を捨て、法悦満足の歡
びに甦生する實例が二三に止まらぬ、「信は道の元功
徳の母、一切の諸の善法を長養す」とは眞に深い意
義が含まれて居ることに今更亦復感激する次第であ

の信仰より進む修養は一會の大家一人も漏らさず無遺敷せよとせ
る、其處に佛教の眞價は存するのである、健全な宗教を離れて人
心の類聚思想の歪化を匡救する能はざる事の明白なれる今日、
佛教の護持宣揚の如何に重要なかは論ぜずして明かである。
右の意味を敷衍されて四十五六分間のお話であつた。

○知法思國會第二回街頭布教誌(其一)

序言

正しき宗教は社會の地である、宗教なき國家は滅亡すると
哲人は叫んで居る、吾等教化を使命とする立場から考へるな
らば、時弊匡救の根本は何んと云つても「人を人格的に覺醒」
させるより他に斷じて方法は無いと確信する、この見地に起
つて再び屋外教化運動を計畫し、四月廿七日(第四日曜)七十
餘名の會員が本部へ集り種々前回の經驗を通して談合した。

今回のプログラムは五月十二日から廿一日まで十日間の日
定で場所は府下灘の川、日暮里町、淀橋町、小石川區江戸川
公園前、上野公園忍阪上、淺草區三味線堀、日本橋區濱町公
園、本郷區新花公園、府下小松川第一小學校前、本所區錦糸
町公園、青山明治神宮參道入口、等を選定、本部では梶木、
箕、山口の三師で警視廳及市公園課それに各管轄警察署講演
場現場へ交渉了解運動に奔走し、一方宣傳用印刷物の調製と
共に在京會員三百餘名に其案内を發した、参加人員實に百六

十有餘名、昨年十月一ヶ月に亘る街頭布教で相當の自信と經
験を持つ本部員は手ぬかりもなく諸般の準備を調へ、彌々街
頭に精進するに至つた。

第一日

五月十二日(曇) 夜七時半 場所 府下灘の川

今日は時あたかも日蓮聖人伊豆伊東御法難の聖日である、
吾等は捨身護法なかるべからず、然かも國民教化運動開始の
第一日であるのだ、豫ての方針通り午後七時灘の川本佛教會
に集合、會主和賀義見師は會堂再建中の多忙な身にもかゝわ
らず先頭に起つて命令を下せば忽ち幹部は馳せ參する、提灯
よ旗よとまたしく間に準備は出來た、旗鼓堂々四邊を壓して
夕間に響く大太鼓の音、玄題の聲戸毎とに驚いて吾等を見守
る町々の人々、其中を男女同志の二列徒隊勇ましくも整へる
聖なる歩みは徐々と既定の灘の川三軒家川崎第百銀行前に進
軍、途中メガホン隊の宣傳よろしく、會場に望めば直ちに聽
衆は吾等を取り捲く、勢頭第一梶木顯正師開會を宣す、續い
て磯部滿事氏、山口智光師、和賀義見師等矢次早やに愛國慨
世の大熱辯は轉ぜられて行く、時移るに従つて聽衆は數を増
す、周囲の空氣は引きしまつて來た、辯論は益々白熱化して
來た野次が飛ぶ、アザヤカな和賀上人の聲減ぶり、各講師と
も其熱誠の砲火速くに徹しよく戦ひよく打つた、彈丸は悉く
命中した、何んと心地よい聖戰の門出であつたのだらう、當

夜二百の聴衆クライマックスに達した時、時計の針は十時を指してゐた。遂く横濱から應援してゐる人々もこの中には居るのだ、名残惜しい、然し亦の機会もある、終ひに閉會を宣した。本佛教會を辭したのは十時卅分にも成つてゐたらうか、でも雨が一つも降らなかつた事は聖祖の照鑒佛陀の御冥護でなくて何んであらう！當夜の應援者は次の如し。

本田健二氏、岸野藤右衛門氏、織原克己氏、山田芳太郎氏、土屋貞太郎氏、龜松壽准松氏、福島健次郎氏、石崎榮宏氏、箕義章師、小日向鐵太郎氏、和賀謙助氏、報恩閣の日暮君、耕一君、五島一雄君、隆之助君、本佛教會信徒婦人連多數等であつた。

第二日の一

同 十三日(晴天) 午前十時 會場 上野公園

講師は和賀義見師「立正安國論」の一節を拜讀本會の趣旨を述べて閉會を宣し、續いて榎木顯正師、世の時勢を慨嘆して日本國民の基本人格を説き儒釋道三教の精髓は日本文化の骨目なりと絶叫す、次で箕義章師、人生に須らく熱なる可からず、と高調力説、次に磯部滿事氏、教化運動は全日本國民の使命なる事を自覺せよ、東亞の光亞細亞の盟主たる自尊心に目醒めよ、と高唱終つて松岡林造氏の閉會の辭に全く會を終つたのは午前を過ぐる四十七分。(當日聴衆二百餘名)施本教百部。來投者は土屋貞太郎氏、盛泰寺總代人片岡勝次郎

中山昌治氏、總引弘氏、坂本敬孝氏、山田芳太郎氏、山田義一氏、加藤重太郎氏、土屋貞太郎氏、安住武都造氏、石崎榮宏氏、坂本泰造氏、宇野博順氏、中島壽惠子姉、齋藤リイ姉、遠山いよ姉、小日向鐵太郎氏、春日金太郎氏、新井彌氏、和賀謙助氏、五島一雄君、報恩閣の耕一君、隆一君、村田顯明君等々であつた。

第三日

同 十四日(晴) 夜七時半 會場 府下日暮里

豫定通り午後七時島谷氏宅へ集合一同同家に法要廻向を爲し七時卅分同家前の十字路角に閉會、榎木顯正師は閉會之辭を述べ次で一本木悦太郎氏、山田義一氏等に後事を頼み直ちに同町銀行臨に向ひ第二隊の運動開始、松岡林造氏の閉會之辭に次で山口智光師、北條平太郎氏、阪上昭氏、一本木悦太郎氏、専修商業生次に阪上昭氏の順で論旨を進める一方第三隊の進軍、日暮里本街道を右へ約一丁直ちに閉會、松岡林造氏閉會之辭次に山口智光師、日暮光道師、榎木顯正師、岩野海軍少將、和賀義見師等交々同時に三ヶ所で憂國慨世の叫びを擧げ、終つて第二隊の坂上氏の陣所に戻り三隊合して陛下の萬歳三唱島谷家に引擧げたのは正に十時廿分であつた。(聴衆合して五百餘名)

時あたかも日暮里町の祭禮であつた爲意外の人出で各町共非常な盛會、本運動としては存外の効果を擧げた。散會に望

氏婦人側では安江久子姉、岡野あきの姉厚木秀子姉等であつた。尙當日片岡勝次郎氏は全員を慰ふ意味で晝餐を御供養下さつた、茲に謹で感謝いたします。

第二日の二

同 十三日(晴天) 夜七時半 會場 淺草區三味線場

午後七時集合所新福井町報恩閣に一同勢揃ひ、榎木氏司會のもとに隊伍堂々「教化運動」と大書した大運動旗を先頭に五十餘名の會員が春の夜の高高く響く大太鼓の音に和して題目口唱街頭道場へと進軍する、早くも會場には齋藤リイ子、遠山いよ子、中島壽惠子等の諸姉テーブル、椅子茶菓等御準備下さつた。

取り捲く聴衆の真中に横濱から参加せる磯部滿事氏閉會を宣すれば、吾等の同志田中道爾氏、中村清一氏、箕義章師、榎木顯正師、和賀義見師等交々起つて憂國覺醒の眞情を披歴し國民相互の自覺反省を促した。

○第二會場では磯部滿事氏の閉會の辭に次で一本木悦太郎氏日暮光道師、廣瀬調氏、箕義章師、松岡林造氏等交々叫ぶ、終つて榎木顯正師の閉會の辭と共に陛下の萬歳發聲一同唱和會を閉じたのは九時を過ぐる四十五分であつた。(當夜聴衆合して五百餘名)施本教百部。來投者は寺奥政市氏、藤田格治氏、小澤源次郎氏、本田健二氏、龜井利一氏、川原きん子、坊三宅たけ子姉、吉田よしを姉岸野藤右衛門氏、川奈義作氏、

み島谷家では一同そばの御供養を下さつた、當日の來投者は龜松壽准松氏、竹内太八郎氏、本田健二氏、岸野藤右衛門氏、齋藤良太郎氏、土屋貞太郎氏、岡野あきの姉、石崎榮宏氏、尾野宮一氏、金指龍吉氏、川奈義作氏、高見澤巖母子、和賀謙助氏、福島健次郎氏、長山慶應氏、五島一雄君、耕一君、村田顯明君、報恩閣果徳婦人會員等であつた。

第四日

同 十五日(晴) 夜七時半 會場 府下淀橋專賣局前

集合場淀橋町柏木常圓寺、午後七時半一同勢揃ひ、旗鼓堂々示威行進一巡、講演會場を專賣局前にするか常圓寺内にするか警官の干渉に未だ決定しない、其内に逕査と會員が押問答を始めた、遂に會員織原克己氏は憤慨して逕査に喰つてかゝる、交番の逕査も弱つて了つて「では專賣局前でおやりなさい、私がお許し致します」と折れて來た、得たりと斗り一同は常圓寺前から專賣局前へと引返して直ちに閉會、榎木顯正師起つて教化運動なかるべからざる國情を論じて三教文化の正系を明せば聴衆の中よりマルキシズムを批判せよと野次る者あり、次で中村清一氏佛敎の正統を論究し次に織原克己氏本會の趣旨を紹介、續いて磯部滿事氏、山口智光師立ち終つて慶大教授柴田一能氏難局打解の道は信仰に有り、と力説す、最後に榎木顯正師閉會之辭を述べ岩野海軍少將の發聲にて天皇陛下の萬歳三唱、別れに際して五十部斗りの教を施本した、

當夜當園寺では小林啓善氏が種々一同へ便宜を與へて下さつた。尙當日の應援者は次の如し。

土屋けん子姉、中田とき子姉、原木秀子姉、川原きん子姉、岩野藤右衛門氏、川奈鏡作氏、吉田よしを姉、中山昌治氏、小野とし子姉、丸川老母、山田英二氏、土屋貞太郎氏、釋眞誓師、毛見春吉氏、山田三五郎氏、一本木悦太郎氏、菊地三郎氏、松本良氏、鈴木秀學氏、松岡林造氏、福島健次郎氏、和賀義見師、鳥谷正三郎氏、和賀謙助氏、宇野博順氏、日暮光道君、五島一雄君、耕一君、隆一君、村田顯明君等であつた。一同散會したのは十時四十分。

第五日

同 十六日(晴) 夜七時四十分 會場 江戸川公園前

集合場を例に依り牛込區早稲田町正法寺として午後七時半一同同寺本堂前に勢揃ひ、住職木村上人の歡待を感謝しつゝ、江戸川目にかけて出發途中メガホン隊の宣傳と共にパンフレットを撒きつゝ矢來町の大通りを太鼓の音勇しく玄題裡に向進、會場には早くも近傍の信徒方が到着を待つてゐた。松岡林造氏の主唱にて會歌「吾等は共に日本の民よ日本の國を護らん爲に」を二回唱和終つて各々「教化」と印した提灯を手にして部所につけば松岡林造氏登壇開會を宣す、續いて磯部滿事氏、總引弘氏、猪又金太郎氏、山口智光師等代る代る愛國の熱意を上げる、聽衆は時を經るに従つて數を増し二百五

十有餘名最後に司會者榎木顯正師閉會の辭を述べ本會々員寺澤萬三氏を煩はして天皇陛下萬歳の發聲一同和唱、散會に望んで「教一教十部を施本した。第二隊(會場矢來町) 榎木顯正師引卒のもとに第二隊を編成牛込区早稲田町向ひ太鼓の音に邊りを壓しつゝ、猛進、阪の中ごろに陣取つて榎木顯正師開會を宣し、次で高矢體教師、磯部滿事氏等交々本會の趣旨を宣揚し「醒めよ人々」と熱心に報國の叫びを上げた、終つたのは九時四十分、直ちに江戸川の本隊に引擧げ一同明日を約して其場に散會した。聽衆合して四百餘名、當夜の應援者次の如し。

龜松壽准松氏、和賀謙助氏、福島健次郎氏、小日向鐵太郎氏、竹内太八郎氏、高矢體教師、土屋けん子姉、川原きん子姉、岩野藤右衛門氏、齋藤良太郎氏、川奈鏡作氏、大關庄太郎氏、入山鏡藏氏、吉田よしを姉、長山慶應氏、總引弘氏、坂場敬孝氏、土屋貞太郎氏、金指萬三氏、菊地三郎氏、野澤一郎氏、西山吉五郎氏、渡邊清吉氏、宇野博順氏、宮下きく姉、遠山いよ姉、小西夫人、安江久子姉、高見澤夫人、平井夫人報恩閣の耕一君、隆一君、五島一雄君、村田顯明君、日暮光道君等多數であつた。(以下次號)

教 報

●東京統一團本部教戰錄

△四月廿七日(第四日曜)午後一時半開會、知法恩國會國民教養講座、慶大教授渡田駒喜氏の「マルキシズム對宗教の順逆的考察」と題する二時間半に亘る講演があつた。先生の愛國の叫び「マルキシズムは非科學的なり迷信なり」の鋭い學術的の批判はマルキスト一派をして顔色なからしむものがあつた、來會者八十餘名。

△五月三日(晴)午前中上野公園道徳布教、午前十時より開始、榎木顯正、高矢體教、大關庄太郎、磯部滿事の諸師法華經主義を基調としたる國民淨化の大獅子吼、聽衆約百餘名、當日富田顯道、村田顯明の諸氏旗持ちビラ撒きメカホン等に奉仕して呉れた。

△同 四日(晴)(第二日曜)午後一時半開會、初めに法會次で講演、本多日生現下には「悲戀と報恩」と題して約二時間三教一貫の精神を論ぜられて思想統一の基準を明され、入り細に亘つて講壇に大感動を興へられた、開會四時半、聽衆百餘名。

△同 十一日(晴)(第二日曜)午後一時半開會、知法恩國會國民教養講座、井上理事の開會の辭に次で四王天中將の「革命的秘結社」と共體語自由、平等、友愛」と題する熱烈なる講演があつた、來會者八十餘名。

△同 十三日、上野公園の布教は別項の通り法會次で講演、「日蓮主義の特色」と題して本多會長親下の御講話があり、終つて、此の程來朝されたホノル、の日比野妙麗尼の信徒光永初代姉嬢呈新編へ歸省中であつたが、當日

上京されたを機會に地明會及報恩團聖德婦人會合同で同師の歡迎懇談會を開く事とした、午後四時半より光永姉を中心し榎木師と同原地明會幹事が幹旋役で歡迎懇談會開會本多日生現下列座榎木師の紹介で主賓光永初代姉の挨拶あり終つて磯部滿事氏のハツイの御話に時を移し數談の二時間、淺草「メツミ」の併當

に舌鼓を打つ、地明會と聖德婦人會から光永姉とホノル、の日比野妙麗尼(祖品全珠)を目録と共に贈呈、遠く離るゝ東西同信のお互ひが一堂に會して語る事は將來吾等門下の上に大なる意義を生ずる事と嬉しくもあり有難くも感じた、同女史はホノル、で生れられ

て然も初めて日本へ來られたといふのであるから特に深い印象があつたであらう、同座された會員七十八名、夜は府下淺橋で街頭布教がある爲に殘惜しくも同六時四十分會を開じ、左に光永姉の挨拶と本多親下の御答辭並に布信者各位への御傳言を記述する。

光永初代女史の挨拶

妾は初めて日本に参りました、日本語がよく判らぬのでございますが、こちらに参りまして統一團の皆さんに本當に親切にして戴きました、何とも御禮の言葉がございませぬ、私共は布哇に生れまして、傳教などは少しも存じて居りませんでした、お蔭さまで日比野さんから有難い法華經のお話を聞かへるやうになつたのでございます。

妾の師匠の日比野さんは、もと此の統一團のメンバーで居らつたやうでございます、十數年前に布哇へお出でになりました、布哇には其の時分から日蓮宗の別院といふものがありましたので、同じ日蓮宗ですから其處へ行つて居られました、併しどうもやはり教が違ふものですから、これでは

到底満足が出来ないといふので其處を
出られて、それから單獨で其の附近
の知つた人を教化されて居つたさうで
あります、その内にダン／＼日比野さ
んの共鳴者が出来て来ました、チヨウ
／＼妾がお知りしたのは三、四年前であ
りました、其の時分には教會といふ
ものが無かつたので、戸別訪問みたい
にして教化をされて居りました。

一方日蓮宗の方は、末藤といふ布教
師が行つて居りましたが、これは長
崎の人で、大崎の大學を出たといふこ
とでありましたが、どちらかといふと
御祈禱が自慢であるらしいのです、長
崎の日親寺といふ寺にその人の親達が
居りますが、その寺がやはり非常に御
祈禱をやる寺ださうです、さういふや
うな關係から布哇でも御祈禱を盛にや
りまして、其の事で警察へ引かれた事
もあつたり致しました。そこへ日比野
さんは本多大信正親下の教化方法でや
られましたものですから人々は大に感
激致します、そして日比野さんの日常
が言ふ事だけでなく、その爲される事
に非常に共鳴したのであります。

日比野さんは昔は身體が非常にお弱
かつたといふことでもあります、さうし

て一時モウ危なかつた時に信仰に入ら
れ、その信仰のお蔭で身體が非常に丈
夫になつたので、有難くて堪えられない、
それでですから若し近所の人達の中で困
つて居るやうな人があつたりすると、
眞心から同情して慰めたりして、いろ
／＼力になつて居られます、今でも、
どうかするの頭が痛かつたり、成は氣
分が悪かつたりして寝込んで居られて
も、誰それが病氣で困つて居りますと
いふやうなお話を聞くと、ヒョウと起
き上つて早速訪ねて行つて、傍へ附い
て居て看護をしたりいろ／＼世話をし
て居て居る、さういふやうな實行の方面が
皆に非常な感動を與へました、それで
皆一も二もなく、あゝいふ教でなくて
はならぬといふ所から、ダン／＼會員
も出来て盛んになり、昨年新に會堂が
出来ました。

妾は最初クリスチャンでありまし
た、所が或る時に日比野さんの御本尊
をお見せになるといふことを聞きまし
たので、見たくて堪えりません、一體
どんな物を拜むのだらうといふので見
たくて堪えりませんでした、併しなか
／＼チヨイト行きましても見せて置け
ません、モウト入らつしやい、モウ少

しお出でになつてお話を聞きなさい
と言はれました、度々参つて居ります
内に、日比野さんの話されました事
がダン／＼妾の心に響いて来ました、そ
うして居る内に或るお正月の時、日比野
さんから「日蓮主義の本當の意味合が
お解りになりましたか」と聞かれました
「今まで何つた所を靜かに考へて見
ますと幾分か解つて来ました」と申上
げました「それでは拜まして上げませ
う」といふので、正月の元日に一般に
お開帳されました其の時御本尊を拜
みました、するとそれが非常に有難く感
ぜられて、其の後御催しのある時には
一日も缺かさず出まして、及ばずなが
ら御手傳をして居ります。妾の家族の
者も日比野さんの態度なり、お話を聴
きまして、成程あれが本當である、日
蓮宗のお寺でやつて居るあの坊さんの
言ふのは間違つて居るといふことを了
解して呉れまして、それから一家舉
つて日比野さんのお仕事を出来るだけ
お手傳をした、先頃野口上人のお出でに
なりました時、不十分ながらお手傳
ひ申上げました、左様な次第で此信仰
を始めましたから、家の内が眞に春の
やうな平和な温かな空氣になり、活き

／＼した家庭になつたことを非常に妾
は喜んで居ります、定に有難く思ひま
す。

どうか皆様、此尊い佛教をひろく
／＼お廣げ下さい、私達は海外に居り
まして及ばずながら、今後は此の有難
い日蓮主義を白人に向つて宣傳して参
りたいと思つて居りますから、將來一
層皆様の御後援をお願いしたいので
ございます、甚だ要領を得ませんが言
葉の關係もありますので至らぬ點は皆
様の御賢察下さいませう、之を以て
御挨拶と致します。

本多現下御答辞と
布哇信者各位へ

日比野妙鏡師は夙に統一閣の教化を
受けた人で、舊い時代の人は能く知つ
て居る譯であります、なか／＼感心な
人で、中途から布哇に行つて法華經の
信仰を傳へたいといふので、彼地へ渡
つて奮闘され、今は信者も澤山あつて
盛に布教に従事して居られるのであり
ます、先般野口日主上人が世界一周の
途次立寄られた時などは、約一ヶ月も
布哇に滞在されたさうですが、その
の間それ等の信者の人々が大層骨を折

つて呉れました、又日比野師は始終私
の所へ手紙をよこして、昨年出来た布
哇の教會に就つて、統一閣の出張所の
やうな考を持つて居るやうで、今度そ
れを寺にするに就ても、統一閣との關
係を頻りに言つて居りました、私はや
はり顯本法華宗の寺院にしたら宜から
うといふことを言つてやつたのです
が、日比野師は、統一閣が發展して布
哇に寺を建てたといふやうな考でやつ
て居る、海にその點に於いては統一閣
の諸君とは縁故の深い譯であります。

此の度その日比野師の教を受けた光
永初代さんが日本に來られて、本日こ
の統一閣で歓迎會を開くといふこと
も、非常に因縁の深い事でありませ
ん、日比野師の手紙に依ると、光永さんは
熱心な信者で、殆ど毎日のやうに日比
野さんの仕事に就てお手傳をし、野口
上人が行かれた時分にも殆ど一ヶ月も
附き切つてお世話をして呉れたといふ
ことであります、御自分も職業がある
譯でありませうけれども、熱心に布教
のお手傳をして下さつて居るさうであ
ります、今度初めて日本へ來られたの
ところが、併し日本へ來て見たと

といふことであります、横濱へ着いて
見ると、日本人の顔からして何となく
性が悪いやうに見えるといふやうな譯
で、今の所では非常に日本に對して矢
望して居られる、それは正直な話で或
はサウ感ずるのが無理もないかと思
ひますが、どうか滞在の中に東京の美
所を觀て歸つて貰ひたいと私も思つて
居ります、或る信者は「光永さんが布
哇へ歸つて、どうも東京へ行つてもつ
まらなかつた」と言はれるのは私達の
恥辱だから、どうか一つ感心さして歸
りたい」と言つて居りましたが、そこ
に又江戸ツ兒氣質を發揮して居る譯で
あります、私は忙しくて案内して上げ
る譯にもゆきませんが、信者諸君の中
には用事の操合せのつく人もありませ
うから、それ等の人の案内でよく一つ
東京を觀て、悪い所もあるが又美しい所
もあるといふ風に、布哇へ歸つたら東
京の美しい所を紹介して戴きたいと思
ひます。

私は此の機會に光永さんに對して、
布哇に居られる信者の人々に簡単な傳
言を頼んで置きたいと思ふのでありま
す、それは難かしい事はこの際申す違
もありませんが、法華經の信心をする

といふ事は誠に幸福なことである、チヨツト考へれば信心といふものはどの宗旨宗派でも同じやうに見えますけれども、實際その教の眞髓をよく探究して見ると、キリスト教よりは佛教の方が優れて居る譯である、その佛教のいろ／＼の宗派の中に於ても、法華經に基く日蓮聖人の教が最もよろしいのであります、此の事は日比野師から教はつて、皆明かに承知して居られることであらう、さういふ結構な、所謂値ひ難き正法に値ひ奉つたといふ法悦は、皆有つて居るであらうけれども、一層正法値遇の喜びを日々に味ふやうにせられたい、人生にはいろ／＼の喜びや悲しみがあるけれども、他の事はみな一時の感情に依つて泣いたり笑つたり、悲しんだり歡んだりするのである、併し正法に値うた悦びばかりは、どんな事があつても少しも變らない譯である、布哇の信者諸君は、同じく日本人としてこの世に生れて、いろ／＼の事情のために布哇に行かれたのであらうけれども、その異境の地に於て幸に此の尊き法華經に値ひ奉つて、茲に正しい教を信するやうになつた、他の事柄ではいろ／＼の不足不満があつても、

この信仰を得たる悦びは何物にも代へ難い結構なものを與へられたといふことを考へて、法華經に値うたる悦びを強く感じ、日々にその事を味はつて、所謂法悦の生活を續けて行くやうに希望するのであります。

實は私が布哇に行つて親しく會つてお話をすれば宜いと思ふけれども、いろ／＼の都合でそれも出来ません、併し是からは若い人がダン／＼出かけて行きます、現に今月の二十五日頃には、小林日種といふ人がこちらを出發し南米を経て布哇に行くさうですから、その人から教を聞くのも宜からうし、又其の他にも若い布道家がダン／＼出来て居るから、次から次へと布哇の方面へも行くことにならうと思ひます。自分が必要行くといふことのお約束の出来ないのは甚だ遺憾ですけれども、教に關する事柄は東京で發行して居る『統一』なりまた『教』といふ雜誌、その他私の著はして居る書物等でも御承知になれようと思ふから、これで諦めて貰ひたい、寫眞が欲しいといふ事ならば寫眞はいくらでもお送りませう、どうか今申す法華經の信仰を得た悦びを味つて、お互にこの正法を持つて行

くやうに致したい、この事を、私が行かれぬことのお説と共に、布哇の信者の方々に御傳言を願ひたいと思ひます。

△同 十八日(晴)(第三日曜)午後一時半開會、初めに法要次に講演、本多現下には「佛教の道徳」と題して約二時間講義を以て從來佛教に對する誤解を訂し佛教は全く大徳教なる事を指示された、聴衆約百餘名。同四時半會を閉じた。それより現下は關西御遊教に旅立たる、我等同志は今晩本郷新花園に於ける街頭布教に赴く。

△同 廿三日(午前十時)街頭布教(上野公園)講師は寛義章師開會の辭を述べ直ちに千葉へ歸山し其後磯部滿事氏と小西日喜師にして時我區教には信仰なかる可らずと力説し聴衆の熱狂に一時開の延長を餘義なくせしめられ午後一時十分大團庄太郎氏の閉會を宣し施本として「教」百部を頒布す。

△同 廿五日(第四日曜)午後一時半開會 知法恩國會主催國民教義講堂開會す。

一、開會の辭 磯部 滿事氏 文部省社會教育局長 磯部 龍吉氏 教育、體育、教化三方面より講述さる

○正法寺便り(牛込區早稲田町) △(例會毎月第二日曜日午後七時)

五月十一日第二日曜日大會を開催す、聴衆百八十餘名。

司會者 木村 敬三君
新佛教の方向 金澤勝次郎君
智仁勇三徳兼備の大英雄 小野 至誠君
修進と解脱 西川 満君
大白牛車に鈴かけて 高吉 純明君
道を求めて 木村 日保師
指導者 (信徒大團庄太郎記)

名古屋布教誌

四月五日 開日抄講義會 原田 日勇師
四月八日 婦人會 清水 一乘師
四月十五日 開日抄講義 原田 日勇師
四月十八日 豊田本社及織機二ヶ所 原田 日勇師
四月十九日 豊田押切工場講義 小林 日種師
小林 日種師

四月廿六日 公開講演 教化會館に於て 本多日生現下
宗旨の本質より見たる佛教 本多日生現下
四月廿六日 日本車輛會社講話 本多日生現下
四月廿七日 立正會唱題會講演 教化會館に於て 本多日生現下
四月廿七日夜 文房具店員修養會 教化會館にて 本多日生現下
四月廿八日午前九時 菊芳紡績講話 本多日生現下

東京統一團教報

◎四月廿五日午後五時より總講會妙滿寺
「大薩婆經講義」 本多 現下
◎四月廿五日午後七時より 日蓮主義大講演會 妙滿寺講堂

「人類文化の最大の恩人釋尊」 河合文學士
「宗教の本質より見たる佛教」 本多 現下
當日は御病氣御養養たりし本多現下は四ヶ月目の關西御遊教の事なれば其の御慈願を拜せんとの親をしたがが如く、あの佛口より出づるが如き尊き御法を傾聴せんものと大早の靈覺を望むが如き心もて風雨をついて會する者堂に滿つ。現下の御健交禮上に現はるれば御病氣を御心配申し上げ居りし一同の心も晴れて感喜の餘り涙する者多かりき、現下の御恩徳を慕ひて寄せし一文を左に照會せん。

先生御早より御さいます、先生は今如何御暮しでしょう、さぞや今頃美しい心で美しい仕事に御向ひで御さいまししょう。どうか此の私等の爲に、迷へる愚かな小さい心の持主の爲に、先生の美しい清い珠の光で、どうか汚ない私等の世界を御照らし下さいます、淋しく暗く生活して居ります、私に數々正しい御光の大聲を御聞

かせ下さいませ、其度に愚かなる私も暗い心から、汚れた世間から、清く正しく美しく明るく美しい心へ御導き下さいます事、さぞ先生の御話しをきかれる人々は皆生々とした喜びを感じていられるでしょう、そして暗い心より明るき心へ心へと淨められるでしょう、先生許して下さい私らは今日と言ふ日をどれだけ待たか知れませんが、今は朝の五時です、今日まだ先生のお話しきかない中から、早や心うれしく早く起きて居ります、今から晩が待ちどろろして居りません、先生許して下さい私は先生が慕はしくてなりません、又先生の口より出るあの美しい正しいお話しきく度に、暗い心がどこかへ行つて清い明るい心になるのが何より楽しう御さいます。先生は私等の世界は御存じ無いでしよう、私は友誼の職人です、私等の世界では、先生の様な高い清い正しいすぐれたお方は業にたくとも有りません、又私等の様な愚かな小さい心の若人を美しく正しく導いて下さる人は、見たくとも一人も有りません、私等の世界の人々は皆々たゞ金銭の話しばかりです、これも正しく働く

千葉 教信

三月十三日 説教 常蓮坊 木村日香師
三月十六日 上太田、關邦治宅 木村日香師
三月十八日 光明寺 木村日香師
三月十九日 上太田、成川宅 木村日香師
三月二十日 上太田、關宅 木村日香師
三月三十日 光明寺 木村日香師
四月八日 降誕會 萬光寺 木村日香師
四月十三日 上大田木原大吉宅 木村日香師
四月二十日 光明寺 木村日香師
四月二十八日 建宗會、古所、安住寺 木村日香師
四月二十六日夜 光明寺見家山崎宅 木村日香師
四月二十七日午後七時第六布教區成東東光會 木村日香師
四月二十七日午後七時第六布教區成東東光會 木村日香師
四月二十七日午後七時第六布教區成東東光會 木村日香師

北陸布教誌

四月二十八日午前四時半より成東愛宕山に於て、立教開宗記念法要並講話「立教開宗の意義」につきて堀江會談、山形英應の二師。
四月二十八日午後七時より成東町本因寺に於て開宗記念法會及講話、堀江山主。
三月一日 立正閣にて 佛陀の祖先 杉田宮飯師
三月四日 渡邊新右衛門宅 同 啓純師
三月五日 信仰の三義 同 啓純師
三月六日 信仰の三義 同 啓純師
三月七日 信仰の三義 同 啓純師
三月八日 信仰の三義 同 啓純師
三月九日 信仰の三義 同 啓純師
三月十日 信仰の三義 同 啓純師
三月十一日 信仰の三義 同 啓純師
三月十二日 信仰の三義 同 啓純師
三月十三日 信仰の三義 同 啓純師
三月十四日 信仰の三義 同 啓純師
三月十五日 信仰の三義 同 啓純師
三月十六日 信仰の三義 同 啓純師
三月十七日 信仰の三義 同 啓純師
三月十八日 信仰の三義 同 啓純師
三月十九日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十一日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十二日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十三日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十四日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十五日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十六日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十七日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十八日 信仰の三義 同 啓純師
三月二十九日 信仰の三義 同 啓純師
三月三十日 信仰の三義 同 啓純師
四月一日 信仰の三義 同 啓純師
四月二日 信仰の三義 同 啓純師
四月三日 信仰の三義 同 啓純師
四月四日 信仰の三義 同 啓純師
四月五日 信仰の三義 同 啓純師
四月六日 信仰の三義 同 啓純師
四月七日 信仰の三義 同 啓純師
四月八日 信仰の三義 同 啓純師
四月九日 信仰の三義 同 啓純師
四月十日 信仰の三義 同 啓純師
四月十一日 信仰の三義 同 啓純師
四月十二日 信仰の三義 同 啓純師
四月十三日 信仰の三義 同 啓純師
四月十四日 信仰の三義 同 啓純師
四月十五日 信仰の三義 同 啓純師
四月十六日 信仰の三義 同 啓純師
四月十七日 信仰の三義 同 啓純師
四月十八日 信仰の三義 同 啓純師
四月十九日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十一日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十二日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十三日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十四日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十五日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十六日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十七日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十八日 信仰の三義 同 啓純師
四月二十九日 信仰の三義 同 啓純師
四月三十日 信仰の三義 同 啓純師

吳 教信

信仰講話 四月三日若杉宅にて 能仁 一十師
道德の天才 能仁 一十師
思想講話 四月五日金澤湖糸工場にて 能仁 一十師
躍進の秋 能仁 一十師
鐵道講話 四月七八兩日津幡驛にて 能仁 一十師
道德の大藝術 能仁 一十師
獅子王青年會 四月十六日立正閣にて 能仁 一十師
獅子王の如くなる心 能仁 一十師
立正閣講演 四月十九日 本郷常次郎氏
人生の無常と佛の教 能仁 一十師
家庭講演 四月二十三日井村宅にて 能仁 一十師
沈澁と感涙 能仁 一十師

昔、宗祖日蓮大聖人出テ邪正ヲ匡シ名分ヲ論ジ佛敎統一ノ旗幟鮮カニ鎌倉街頭ニ懸ル開祖日什大聖師出ルニ及ンデハ外ハ權門邪法ヲ折伏シ、内ハ門下ノ歸正ヲ計リ、顯本法華ノ基礎ヲ立ツ、爾來春風秋雨五百餘年釋尊ノ正系傳ハリテ獨リ我が宗ニアリ、立正大師ノ遺教流レテ我が宗ノミ存スト云フモ、決シテ溢美ニ非ズ、而シテ宗祖ノ遺教タルヤ、個人ニハタ國家ニ、家庭ニハタ社會ニ達ムベキノ道ヲ訓ヘ、其ノ教、適切、其ノ道該博、以テテ時人醒ルベシ、時世之ニ準ツベキ也、今ヤ時運其ノ極ニ達シ、國本爲ニ危フカラントスルノ秋、思ヘバ世出二門ノ重責繁リテ我が徒ノ双肩ニ在リ、法鼓頻リニ撃タズンバ有ルベカラズ、心田深ク耕サズバアルベカラズ、抑モ吳ノ地タルヤ此ノ故ヲ以テ本宗輔徒數力努ムル事茲ニ年有リ、現會館之山岡俊顯ニ到リ、漸ク其ノ成果ヲ結ブ、斯ノ如キハ教運ノ隆昌ヲトシテ以テ喜ブベク、内ハ門徒ノ信仰ヲ愈々篤クシテ外ハ教化ノ實効今日ヨリシテ更ニ一層ノ進展ヲ見ルベキヤ必セリ、日成本日其ノ落成ノ祝典ニ列シ、大本尊奉安ノ法要ヲ督スルニ當リ歡喜實ニ云フ處ヲ知ラズ、嗚呼、今日、此ノ喜ビアルハ一ニ現任先住先人

大僧正 井村 日成 敬白

前月號吳島吳法戰記中に吳立正會館落成開堂供養の略報ありしが左に菅長井村現下の慶讃文を掲ぐる。
慶讃文
謹而勸請シ奉ル本門菩薩ノ大本尊來臨影響知見照覽アラセ給へ。
維時昭和五年四月十六日 當吳市立正會館新築落成大本尊奉安ノ式典ヲ奉グルニ當リ、謹シテ慶讃文ヲ捧グ。
偈々惟ルニ佛法東土ニ渡リテ年久シク堂塔雲ニ聳へ、法音四方ニ響ク、八宗十宗蘭菊美ヲ競ヒ、我が國文化ノ華ヲ飾ル七百年ノ往

今人憐愍苦心ノツノ効ニ據ルモノニ非ズシア何ゾ、感慨ノ念、イヨノ一切ニシテ感涙ノ情轉タ滋キテ覺ユルナリ、經ニ曰ク、乃至童子戲聚沙爲佛塔知是諸人等皆已成佛道、其ノ善其善ク、其ノ行深ク慶讃スベキ也。
願クハ正法興隆國土安穩寺檀和合法統承繼乃至法界利益周遍。
維時昭和五年四月十六日
顯本法華宗會長
大僧正 井村 日成
敬白

誌料領收 自四月二十二日 至五月二十日

| | | | |
|----------|-------|-----------|-----|
| 一金貳圓貳拾錢也 | 大 阪 | 小 澤 | 廿 殿 |
| 一金六圓也 | 札 幌 | 本 澤 | 正 殿 |
| 一金貳圓也 | 青 森 縣 | 鈴 木 源 | 八 殿 |
| 一金貳拾九圓也 | ホノルム | 日 比 野 妙 | 鏡 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 大 阪 | 長 谷 川 一 | 郎 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 千 葉 縣 | 谷 本 | 繁 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 豐 橋 | 田 村 仙 | 作 殿 |
| 一金壹圓六拾錢也 | 長 崎 縣 | 毛 利 亮 | 修 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 大 阪 | 加 納 小 | 松 殿 |
| 一金貳圓四拾錢也 | 同 | 高 橋 秀 太 | 郎 殿 |
| 一金五圓也 | 朝 鮮 | 川 上 讚 二 | 郎 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 橫 濱 | 岩 上 浦 三 | 郎 殿 |
| 一金參圓也 | 川 崎 | 廣 瀨 | 調 殿 |
| 一金四圓四拾錢也 | 大 阪 | 橋 谷 寬 次 | 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 同 | 有 田 寬 英 | 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 仙 臺 | 井 上 才 吉 | 殿 |
| 一金拾圓也 | 大 阪 | 蓮 成 寺 | 殿 |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 北 海 道 | 林 啓 太 郎 | 殿 |
| 一金九圓也 | 神 戶 | 熊 井 本 光 殿 | |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 東 京 府 | 坂 田 福 子 殿 | |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 大 阪 | 梅 澤 常 吉 殿 | |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 同 | 木 村 祥 殿 | |

一金參圓也
 一金貳圓四拾錢也
 一金拾圓也
 一金貳圓貳拾錢也
 一金壹圓也
 一金五圓貳拾錢也
 右難有入帳仕候也

外に左の御寄附あり厚く奉感謝候
 一金五圓也

四八

| | |
|-------|-----------------|
| 桐 生 | 大 澤 いし子 殿 |
| 東 京 | 早 川 龜 太 郎 殿 |
| 大 阪 | 立 正 結 社 翼 贊 會 殿 |
| 山 形 縣 | 長 澤 辨 太 殿 |
| 長 崎 縣 | 福 田 亮 慶 殿 |
| 川 崎 | 毛 見 春 吉 殿 |

「統一」 會 計
 盛 岡 中 村 謙 藏 殿

國民教養講座案内

本月の講座は左記の通り我等日本國民として思想上是非共知悉せざる可らざる最も適切肝要なる科目と斯界の權威たる兩講師の御出講に付希くは萬障を排して御來聽あらんことを

一日 時 六月八日及二十二日
自後一時半 至四時

一會 場 統一閣 淺草區北清島町
十四 電車通

一科目講師

一 聖德太子と三教鼎立

前東洋大學々長 境野黃洋氏(八 日)

一 建國史の概要

神宮奉齋會々長 今泉定介氏(廿二日)

一 聽講料 一科金貳拾錢

但教員、軍人、警察官は無料

昭和五年六月

知法思國會本部

| 價定一統 | | |
|------|--------|------|
| 一冊 | 金貳拾錢 | 送料五厘 |
| 半冊 | 金壹圓貳拾錢 | 送料共 |
| 一ヶ月 | 金貳圓貳拾錢 | 送料共 |
| 一年 | 金貳圓貳拾錢 | 送料共 |
| 事之金前 | | |

| 料告廣一統 | | |
|-------|------|---|
| 表紙一頁 | 金貳拾錢 | 圓 |
| 一頁 | 金拾五錢 | 圓 |
| 半頁 | 金九錢 | 圓 |
| 四分一頁 | 金五錢 | 圓 |
| 事之金前 | | |

昭和五年三月廿四日印刷納本
昭和五年六月一日發行 (第四百二十三號)

製復許不

編輯人 磯部滿雄
發行人 鈴木日雄
印刷所 東京府在東區品川町南品川百八十一番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

宗教の本質より見たる佛教(上卷)……………本多日生

記 事……………

○知法思國會街頭布教誌(完了)

○開堂供養

○各地教報

○誌料領收

號月七年五十三第

